

『蒙古秘史』の動詞対 üderi-/üderid- に見える末尾の -d- の解釈をめぐる *
塩谷 茂樹

目次

1. はじめに
2. 問題箇所及び従来の見解
3. üderi- を基本形と見る立場
 3. 1. üderi- の語構成分析
 3. 2. 旧情報と新情報
 3. 3. アスペクト接辞 (Aspectual suffix)
 3. 3. 1. 完成体
 3. 3. 1. 1. 保安語の完成体接辞 -dә-(-tә-)
 3. 3. 1. 2. 蒙古語の完成体接辞 -tix-(-tji-)との関連性
 3. 3. 2. 暫時体
 3. 3. 2. 1. 内蒙古方言 xals-
 3. 3. 2. 2. 内蒙古方言 (Mo.) čalgis-
 3. 3. 2. 3. 中世文献『ムカディマツト・アル・アダブ』に見える širsa-
 3. 3. 2. 4. 蒙古語の音節末子音 -s-~-d- の交替
 3. 3. 2. 5. 蒙古語 (Mo.) üküdkе-/üküdkü-/üküdkі- に見える要素 -d-
 3. 3. 2. 6. ツングース系言語に見えるアスペクト接辞 -t-/-s-
 3. 3. 3. 眼前現象の強調
 3. 3. 3. 1. 内蒙古語・下位方言の口語に見えるアスペクト接辞 -dä⁴-
 3. 3. 3. 2. 新情報との関連性
 3. 4. 語派生接辞 (Derivational suffix)
 3. 4. 1. 蒙古語に見える語派生接辞 -d-
 3. 4. 1. 1. ハルハ方言 шигд-
 3. 4. 1. 2. ハルハ方言 улайд-
4. üderid- を基本形と見る立場
 4. 1. üderid- の語構成分析
 4. 2. 『秘史』üderi-/üderid- と蒙古語 üdele-(үдлэ-)との語形成関係
 4. 2. 1. 『秘史』üderi- の交替と見る解釈
 4. 2. 2. 『秘史』üderid- の交替と見る解釈
 4. 3. この立場に対する問題点
 - 特に、蒙古文語にのみ見える -d- 語幹動詞の分析を通して --
5. おわりに
6. 附録
 6. 1. 『秘史』の動詞語幹 qal-/qalid-
 6. 2. 『秘史』の動詞語幹 兀里思-

1. はじめに

『蒙古秘史』(Mongγol-un niγuča tobčiyān)は、中世蒙古語を代表する、質量ともに群を抜いた漢字音訳資料である。

本稿は、この『蒙古秘史』に見える、現代語では全く実証されない2つの動詞語幹 üderi-/üderid-が当時一体いかなる意味の差異を示していたか、特に、末尾の-d-をどのように解釈すべきかを、蒙古語族の諸言語及び諸方言から推定し、いくつかの見解を提出することを目的とするものである。

2. 問題箇所及び従来の見解

さて、問題箇所は『蒙古秘史』の巻6、170節である。

(§ 170)…帖^キ列 歌多魯克薛額^キ児 馬納中合^キ児石 兀都^キ児都里 納^キ闌 客別里兀侖
tere ködölügse'ēr managarši üdür düli naran kebeli'ülün
(チンギス可汗は)その移動しながら、翌日 一日中 日を 傾けさせ、
中合^キ刺中合^キ勅只^キ惕 額列^キ惕 古^キ児拙 兀迭^キ鄰 巴兀罷
Qara qaljid eled kürčü üderin ba'üba.
カラ・カルザド 砂漠に 到り、 休食しに 下馬した。
兀迭^キ里^キ拙 不恢突^キ児 阿^キ勅赤歹因 阿^キ駟思 阿都兀刺兀^キ勅孫 赤吉歹 牙的^キ児
üderidčü бүкүй-дүр Alčidai-yin agtas adu'üla'ülsun Čigidai Yadir
休食して いる時に、 アルチダイの去勢馬 放牧人 チギダイ、ヤディルが
主亦列 主亦列 那中豁安突^キ児 阿^キ駟昔顔 阿都兀闌 逐步中灰突^キ児 中豁亦納察
jüyile jüyile nogo'ān-dur agtas-iyān adu'ülan yabuqui-dur qoyina-ča
所々 新草のところで 自分の去勢馬を放牧している時に、 後ろから
卯温都^キ命 額不^キ里耶^キ児 忽刺安不^キ魯中合^キ惕 荅阿^キ鄰 阿亦速中灰 歹亦訥
Mau ündür-ün ebür-iyēr Hula'ān buruγad da'ārin ayisuqui daiyin-u
マウ・ウンドウル(山)の南面を通して フラアン・ブルガドを経て やって来る 敵の
脱兀速泥 兀者周 歹因 古^キ児罷 客額周 阿^キ駟昔顔 忽^キ迭額^キ惕 亦^キ列周…¹⁾
to'usun-i üjejü daiyin kürbe ke'ējü agtas-iyān hülde'ēd irejü
砂塵を 見て、「敵が到った」と言つて 自分の去勢馬を 追つて やつて来て、…

ここで、問題の兀迭^キ鄰(üderin),兀迭^キ里^キ拙(üderidčü)は、それぞれüderi-n(-nは是非分離・副動詞語尾; Mo.-n), üderid-čü(-čü は結合・副動詞語尾; Mo.-ju²/-ču² ²⁾)と分析されるから、ここに2つの動詞語幹üderi-, üderid-が抽出されることになる。

形態的観点から厳密に見れば、中世のこの2つの動詞語幹に対する直接の後身は、現在のいかなる蒙古系諸言語でも実証されない。しかし、『秘史』のüderi-/üderid-が現在の

いかなる語におおよそ相当するの点においては、蒙古語学者の見解は一致し、Mo. üdele-(蒙古語 үдлэх)《休食する》と比定している。³⁾

例えば、当該箇所のみを抜粋して示すと次のようになる。⁴⁾

・ Дамдинсүрэн(1976)

--- үдлэн буув. Тэнд үдлэж байтал,---

休食しに 下馬した。そこで 休食して いると

・ Bayar(1981)

--- üdelen bayuba. üdelejü бүкүй-дүр---

休食しに 下馬した。休食して いる 時に

・ Mansang(1985)

--- üdelekü-ber bayuba. tende üdelejü bayitala---

休食しに 下馬した。そこで 休食して いると

・ Eldengtei, Ardaĭab(1986)

兀迭₅鄰(üderi-n)/ üdele-n, üde-yin amaralta amaraqu.

昼(正午)の 休息を とる

兀迭₅里₅抽(üderid-čü)/ üdele-jü, üde-ber amaraĭu bayiqui-dur

昼(正午)頃 休息して いる時に

これらの訳文(現代語訳)を見る限り、『秘史』の2つの動詞語幹üderi-, üderid-に対し、何らかの意味上の差異が全く見られない以上、先学の蒙古語学者達は、この点にそれほど注意を払わなかったか、あるいは仮に注意を払ったとしても、それに対する解決策を見い出せなかったものと考えざるをえない。⁵⁾

さらに、『蒙古秘史』は、当時の蒙古語(中世蒙古語)を漢字で音写し、その右に単語ごとに漢字で直訳を施し、節ごとに大意を記す形式を取っているが、『秘史』のüderi-, üderid-が現代語で全く実証されない(現代語には伝承しなかった)ため、彼らが最も訳出の拠り所にしたのは、間違いなくこの箇所の傍訳であろう。

(音訳)---兀迭₅鄰 巴兀罷 兀迭₅里₅抽 不恢突₅児---

üderin ba' ūba. üderidčü бүкүй-дүр

(傍訳)---歇餽 下了 歇餽 着 有時---

以上からわかるように、『秘史』のüderi-, üderid-に対する傍訳に、いずれも《歇餽》(昼休み、昼食後の休息)という訳語が当てられ、明確な意味上の差異が見られないことも上掲の訳出に大きく影響を及ぼしているものと思われる。

3. üderi- を基本形と見る立場

3. 1. üderi- の語構成分析

この立場に従えば、『秘史』に見えるもう1つの形式üderid-は、üderi-d-と分析され、

-d-はsuffix、すなわちdeverbal verbal suffix(以下、適宜名詞はN、動詞はVと略することがある)と解することができる。⁶⁾

ここでは、動詞üderi-を形態的にいかに分析すべきかということを検討してみたい。

『秘史』のüderi-は、その傍訳より、名詞Mo. üde(蒙古語 үд)《正午、真昼》と直接関係あると考えられるから、少なくともüde(N)-ri-(N→V)と分析できるのである。⁷⁾

さて、ここで問題となるのは、従来通常denominal verbal suffix(N→V)-ri-の存在はまだ報告されておらず、この1例でもってその存在を認めてよいのかという点である。これに対しては、今後いくつかの並行例が呈示されれば、その存在を認定できるのであるが、筆者は現在の所、この立場にはまだ慎重であるべきだと考える。筆者は、むしろ『秘史』のüderi-に対し、元来*üdere-(< üde(N)-re-(N→V))を仮定し、『秘史』のüderi-がこの*üdere-の《単発性、一回性》を表す動詞語幹であると考えたい。⁸⁾ 以上が『秘史』に見える2つの動詞語幹の語構成に対する筆者の見解である。

3. 2. 旧情報と新情報

本論に入る前に、先ず注目すべきことは、『秘史』の当該箇所コンテクストに現れる2つの動詞語幹の出現順序である。『秘史』では、---üderin ba'üba. üderidzü büküi-dür---のように、先ずüderi-が現れ、次にüderid-が現れているのであって、決してその逆の順序、すなわち、---*üderidün ba'üba. üderijü büküi-dür---ではないことに注意したい。これは、すなわち、談話の流れからして、üderi-が旧情報、üderid-が新情報を担っていると捉えるのが自然であろう。したがって、この場合 üderid-の-d-(deverbal verbal suffix)がまさに旧情報と新情報を区別する働きをしていることになる。

3. 3. アスペクト接辞 (Aspectual suffix)

さて、いよいよ本論に入り得る段階に達したので、以下、『蒙古秘史』に見えるこの2つの動詞語幹が当時一体いかなる意味の差異を示していたかについて論ずることとする。

2.で述べたように、『秘史』のüderi-, üderid-の間には語義上の明確な差異は全く見られないから、両者は動詞の何らかのアスペクトの差を反映している可能性がある。

3. 3. 1. 完成体

3. 3. 1. 1. 保安語の完成体接辞 -də-(-tə-)

『秘史』のüderid-の-d-が《完成体》の意味を表示していたのではないかという見解は、蒙古語族のうち、甘肅・青海省の孤立言語である保安語⁹⁾によって支持される。

保安語では、同仁方言に属する年都乎(以下、(年)と略す)でsuffix -tə-, 保安下庄(以下、(下)と略す)でsuffix -də-(なお、大河家方言に属する甘河灘で-tə-/də-)によって完成体の意味が表示される。¹⁰⁾

(年) həŋgəragudʒi ɳgeləʈəna. (cf. Mo. kebte-megče unta-čiqa-na.)

(即刻) (完成体)

横になるとすぐに 眠ってしまう

(下) medəglə ɳedədʒ. (cf. Mo. čečeg-üd negege-čike-jüküi.)

(複数) (完成体)

花が 開いてしまった

3. 3. 1. 2. 蒙古語の完成体接辞 -tfix-(-tʃi-)との関連性

さて、現代蒙古語において動詞の完成体接辞と言え、一般に-tfix-, -tʃi-(Mo.-čiqa-/ -čike-)である。

• Төөрөөд онгоцноос хожимд чих байх гэж

道に迷って 飛行機に 遅れてしまう だろう と

айгаад гадагшаа гараагүй.

こわがって 外に 出なかった

Чи яагаад ойрдоо над руу утасдахаа

君は なぜ 最近 私 に 電話をしなく

бай чих аа вэ?

なってしまったの か

この接辞の起源に関しては、従来蒙古語学者達の間では、結合副動詞語尾 -d3(-tʃ) (Mo. -ju²/-ču²)に動詞(機能的に助動詞と見ることもし得る) orxi- (Mo. orki-) 《捨てる、置き去りにする》が結合し、縮約した結果、歴史的に-tfix-が形成されたと考えられている。¹¹⁾ また、完成体のもう1つの形式-tʃi-は、現在では、一般に-tfix-の簡略形式¹²⁾ (あるいは不完全形式)、すなわち-tfix->-tʃi-と考えられているが、以前は一部だが、結合副動詞語尾 -d3(-tʃ)+動詞otʃi- (Mo. oči-) 《行く》に由来するという考えもあった。¹³⁾ また、文語形式(Mo.)-čiqa-/ -čike-は、口語形式-tfix-に基づいて、しかも蒙古文語の母音調和の規則に従って、後に新しく造られたものである。

中世蒙古語文献では、現代蒙古語のように-tfix-(-tʃi-)は一般に立証されないから、もし『秘史』のüderid-の-dが完成体を表示していたと仮定するならば、少なくとも次のように推定することは可能であろう。すなわち、中世蒙古語においては、動詞の完成体は2種類の方法、つまり、1つはsuffix -d-という単純形式で、もう1つは何らかの副動詞語尾+動詞(助動詞)(例えば、od-《行く》etc.)といういくつかの複合形式で表されていた。しかし、言語の歴史的過程において、後者の複合形式のうちの1形式(-d3/-tʃ orxi-)が一般化され、-tfix-という単純形式となって発展する¹⁴⁾と同時に、元来単純形式であったsuffix -d-が蒙古語及びその他大多数の蒙古系諸言語で衰退消失してしまい、ただ保安語においてのみ残存し、それを-da-(-ta-)として発展させたのであろうと。¹⁵⁾

	中世蒙古語		現代蒙古語
単純形式	-d-	……→ 衰退	∅ (cf. 保安語 -də-/-tə-)
複合形式	副動詞語尾 + 助動詞 (-ju ² /-ču ² orki-)	---→ 発展	-tfix-(~-tji-)

以上、3.3.1.の見解に従えば、『秘史』の当該箇所は、次のようなニュアンスを含む文と理解できる。

---休食しに下馬した。(チンギス可汗がそこで)十分に／すっかり／すでに休食している時に、「敵が到れり」と言ってチギダイ、ヤディルが自分の馬を追ってやって来て、---

---үдлэн буув. (Чингис хааныг тэнд)

үдлэ чихээд (～нэгэнт үдлээд) байхад, “Дайсан ирлээ” гээд Чигидай Ядир хоёр адуугаа тууж ирсэнд---

3.3.2. 暫時体

筆者は、かつて蒙古語族においてdeverbal verbal suffix -s-が非生産的ながらも《瞬時体》(momentary aspect)の意味を表示するという結論を出したことがある。¹⁶⁾

ここでは、deverbal verbal suffix -s-がこの他、さらに《暫時体》の意味をも表示することを先ず論証した上で、『秘史』のüderid-の-d-がこの《暫時体》の意味を表示していたのではないかという可能性について言及したい。

以下、3.3.2.1., 3.3.2.2., 3.3.2.3.で、先ずdeverbal verbal suffix -s-が暫時体の意味を表示しうることを論ずる。

3.3.2.1. 内蒙古方言 xals-

蒙古語・内蒙古方言には、xals-《少し酔う》という動詞語幹がある。この語は、xal-《熱くなる》の派生語であり、内蒙古の『蒙漢辞典』(1976)には、それぞれ次のように記述されている。

・Mo. qalasa-《(不及)①热、发热②略有醉意》

arikin-du qalasa-《略有醉意》

・Mo. qala-《(不及)①热、烫、发热…》

toɣoɣan-u usu qala·ba《锅里水热了》

arikin-du qala-《酒酣耳热》

一方、ハルハ方言(モンゴル人民共和国の標準語)では、**халх**《熱くなる》は用いられるが、**халсах**という語が内蒙古方言のように《少し酔う》という意味で用いられることはない。¹⁷⁾一般に内蒙古方言の口語¹⁸⁾で、“erxind xalsla:.” (cf. Mo. arikin-

du qalasa·la.)と云えば、ハルハ方言の архинд жаахан халлаа (～халамцлаа).《酒に少し-酔った》という分析的表現にほぼ相当することを考慮に入れると、内蒙古方言に見える動詞語幹 xals-は、xal-s-<qala-s-と分析でき、この-s-には暫時体の意味が含まれているものと解釈することができる。

3. 3. 2. 2. 内蒙古方言 (Mo.) čalgis-

内蒙古の辞書類(ここでは、『蒙語正音正字詞典』(1977)、『蒙漢辞典』(1976)の2種を取り上げる)には、Mo. čalgis-という動詞がMo. čalgi-とともにそれぞれ次のように説明されている。

・ Mo. čalgis- [tʃalgasah] baɣa ʃerge čalgi-

少し こぼれ(出)る

《(不及)稍迸出、稍濺出、激濺》

・ Mo. čalgi- [tʃalgah] dolgiʃu asqa-

揺れて こぼす

《(不及)晃蕩、蕩出、晃出、迸出、濺出、激濺》

一方、ハルハ方言では、цалгих (cf. Mo. čalgi-)は一般に《(容器に入った液体が)揺れてこぼれ(出)る》ことを意味し、例えば、Аягатай цай цалгив.《茶わんに入ったお茶が(揺れて)こぼれた》のように用いられるが、цалгисахが内蒙古方言のように《(揺れて)少しこぼれる》という意味で用いられることはない。¹⁹⁾

したがって、内蒙古方言に見えるMo. čalgis-は、čalgi-s-と分析でき、この-s-には暫時体の意味が含まれているものと解釈することができる。

3. 3. 2. 3. 中世文献『ムカディマツト・アル・アダブ』に見える širsa-

中世のアラビア字蒙古語文献『ムカディマツト・アル・アダブ』(以下、『ム』と略す)では、širsa-という動詞語幹が見える。

(336) širsa·ba ɣarni -- ч. qurī·dī eliki

かわいた 彼の手(が)《его рука высохла》

ここで、蒙古語 širsa-は、チュルク語 qurī- (現在のトルコ語の kuru- 《かわく》)に対応する)との対訳により、少なくとも当時《かわく》という意味で用いられていたことは明らかである。しかし、この語は現在のいかなる蒙古系諸言語でも実証されず、現在ではこの語の直接の後身を見ることはできない。

また、さらに同文献では、動詞語幹 šira-が見え、こちらの方は《焼く》の意味で現在の蒙古語族に完全にその後身を見い出すことができる。

(335) šira·ba ɣal-du 《жарил его на огне》

焼いた 火で

šira·qsan 《жаренный》

焼いた

šira·qsan miqan 《шашлык》

焼いた 肉

Mo. sira- (L) 《vt. To roast, broil, fry---》

保安語 čira-, 東郷語 šira-, 土族語 čira:-, 東部裕固語 ɟəra-, ダグール語 ɟar-, 蒙古語 шаp-.

さて、筆者は、『ム』に見える širsa-が上述した šira-の派生語であったのではないかと考える。私見によれば、『ム』の širsa-は、širsa- < širas- < sira-s-と分析され、この -s-が暫時体の意味を内に含んでいるものと解釈する。すなわち、širsa-という動詞語幹に対し、本来《(火で)完全に焼くのではなく、少し／しばらく焼く》という意味を仮定し、これが《あぶる、火でかわかす》を意味するようになったのではないかと考えられる。

また、同文献でさらに動詞語幹 qatā- (cf. 蒙古語 хатах) が、
(295) qatā·qsan miqan 《сушеное мясо》

かわかした(干した)肉

(296) qatā·ba miqan-i 《вялил мясо》

かわかした(干した)肉を

のように《かわかす、干す》の意で用いられていることから、上述した širsa-との基本的な意味の違いは、《かわかす》手段として、一般に火を用いるかいなかであったのではないかと考える。すなわち、širsa-は、一般に《火でかわかす(→あぶる)》という意味であったのに対し、qatā-の方は、太陽・風など一般に《自然の力でかわかす》という意味であったのではないか。ただし、ここで1つ問題となるのは、『ム』に見える širsa-が自動詞の意味で用いられ、筆者の推定した他動詞の意味と違いを示すという点だが、これは蒙古語の若干の動詞²⁰⁾に見られる自動詞・他動詞両意語幹を設定することによって処理できる問題なので、ここでは、それほど議論の妨げとはならないであろう。²¹⁾

したがって、『ム』(336)に見える例文(蒙古文)は、《彼の手が自然に乾いたのではなく、火でかわかした(あぶった)結果、かわいた》の意に理解すべきであろう。

以上、3.3.2.1., 3.3.2.2., 3.3.2.3.の3つの例によって、deverbal verbal suffix -s-が蒙古語において暫時体の意味を表示しうることを明らかにした。²²⁾

3. 3. 2. 4. 蒙古語の音節末子音-s-~d-の交替

さて、ここで蒙古語の音節末の位置で一般に-s-~d-の子音交替²³⁾が見られることを思い起こそう。

a) 動詞の語幹末子音として

Mo. deled-(дэлдэх) ~ deles-(дэлсэх) 《打つ、たたく》

Mo. egüd- (үүдэх) ~ egüs- (үүсэх) 《生ずる、起こる》
 b) 形容詞から動詞(自動詞)を形成する suffix として

Mo. baγa(бага)《小さい》> baγad-(багадах)《小さくなる》
 ~ baγas-(багасах)

Mo. yeke(их) 《大きい》> yekeḍ-(ихдэх) 《大きくなる》
 ~ yekeṣ-(ихсэх)

c) 方言間における音節末の子音対応として

Mo.	蒙古語(ハルハ)	ブリヤート語
bos-	《起きる》: босох [bos-]	бодохо [bod-]
emüs-	《着る》: емсөх [ems-]	үмдэхэ [umd-]
Mo.	ハルハ中央方言	ハルハ東方言 ²⁴⁾
ebed-	《痛む》: өвдөх [өwəd-]	өвсөх [өwəs-]
qabud-	《腫れる》: хавдах [xawd-]	хавсах [xaws-]

以上の事実は、上述した《瞬時体・暫時体》を表示する deverbil verbal suffix -s- の存在と同時に、同じ意味を表示する deverbil verbal suffix -d- の存在の可能性を強く示唆するものである。

次節では、実際に deverbil verbal suffix -d- が deverbil verbal suffix -s- と同様、《瞬時体》の意を表示していると思われる一群の動詞について検討を加えることにする。

3. 3. 2. 5. 蒙古語 (Mo.) üküḍke-/üküḍkü-/üküḍki- に見える要素-d-

(L) Mo. üküḍke-, üküḍkü- 《vi. To faint, become unconscious》

(二十一卷本) üküḍkü·geči ebedčin / nige kedün edür tasiyalan nigente genedte

数 日 たって 一度 突然

tatabalġan maγūjiraqui-yi anu üküḍkügeči ebedčin kememüi.

けいれんし 気絶することを 意識を失う 病気(「てんかん」と言う

(Ⅲ) üküḍki- / maγūjiraqu metü-yin

気絶する 等 の

üküḍkü·gči ebedčin / bayin bayin maγūjiraqu ebedčin

何度も 気絶する 病気

これに対する中世蒙古語及び現代語の諸形式は次のようである。

(秘) 兀窟_{蒙古}(üküḍgü-)《昏》(196)

塔陽中罕	兀格突 _舌 兒	米訥	兀窟 _{蒙古} 周	幹額迭	帖蔑纏	兀 _舌 兒古周	中合 _舌 兒罷
Tayang qan üge-dür	minu	üküḍgüjü	ö'ēde	temečen	ürgüjü	garba.	
タヤン汗は	言葉に	← 私の	意識がボーとし	上へ	争い	驚き	上がった

(内蒙古) üküdkī-(正音正字)[uhəthi:h] mayujiran una-

失神し 倒れる

(蒙漢)《(不及)〈旧〉昏倒、暈倒、暈厥》

(ハルハ)²⁵⁾

(Ц)үхтгэх / ухаан мэдрэл алдаж балардах

意識を 失い ボーとなる

үхтгэгч өвчин てんかん

үхэтхийх / муужран унах, үхтгэн унах

失神し 倒れる 気絶し 倒れる

үхэтхийн унах 失神し倒れる

(ブリアート)үхэдхэхэ(допуст. от үхэхэ)《обмирать》

үхэхэの使役形 気を失う

e.g. үхэдхэн унашаба《замертво упал》

(強調) 意識を失って 倒れた

үхэдхэнги《мертвенный》

死んだような

以上の例から、形態的に異なる3つの蒙古文語形式üküdke-/üküdkü-/üküdkī-を取り出すことができる。

第1の形式üküdke-は、形態的にükü-d-ke-と分析され、ükü-(cf.蒙古語үхэх)は《死ぬ》を意味する動詞語幹、-d-はここで最も重要な意味を持つ deverbil verbal suffix, -ke-は(deverbil verbal)causative suffixと解釈することができる。筆者の考えでは、この-d-は、まさに《瞬時体》を表示するものと解釈されるから、動詞üküdke-に対し、元来《瞬間死んだようになる、一瞬死んだ状態になる》という意味を仮定することができ、これが《意識を失う、失神する、気絶する》等を意味するようになったものと考えることができる。

また、第2の形式üküdkü-に対して、筆者は、小沢²⁶⁾と見解を異にし、第1の形式の発展形、すなわちüküdke- > üküdkü-と見る。これは、一種のlabial attractionが起こったと見る考えであるが、この変化は、少なくともüküdke-において、causative suffix -ke-がその本来の意味を失い、語彙的に完全に1つの自動詞として意識されるようになった後に起こったのではないかと推定される。²⁷⁾

さらに、第3の形式üküdkī-に対しては、前者の2形式とは異なる、独自の発展を遂げたものとする。私見によれば、第3の形式に対する口語形式uxədxī:- ~ uxətxī:-(cf.蒙古語үхэтхийх)に見える要素-xī:-は、現代蒙古語の、いわゆる瞬間動詞に見える、数的に圧倒的に優勢な-sxī:-(これは、《暫時体》を表示するsuffix -sxī:- (V→V)とは異なり、共時的にも-s+xī:-と分析可能である)²⁸⁾の要素-xī:-に対する類推が、同じ瞬間動

詞の口語形式 *uxədxə-* (これは *Mo. üküdkē-, üküdkü-* に対する口語形式である) に働き、*uxədxə- > uxədxɪ:- ~ uxətɪ:-* と変化した結果、生じたものと解釈する。つまり、蒙古文語に見える *üküdkī-* は、*üküdkē- > üküdkü-* という変化の延長上に位置付けられるものだが、あくまでも、類推によって生じた口語形式 *uxədxɪ:- ~ uxətɪ:-* を反映したものであり、後に文語形式に取り入れられたものとする。

以上、3つの蒙古文語形式 *üküdkē-/üküdkü-/üküdkī-* に関し、その語構成及び成立過程について簡単に私見を述べた。特に、3つの形式のうちで、最古の形態を示していると考えられる *üküdkē-* において、deverbal verbal suffix *-d-* が《瞬時体》を表示している可能性について言及した。ここで、さらに強調したいことは、上述の一群の動詞に対し、例えば、蒙古文語において **üküske-/ *üküs-kü-/ *üküs-ki-* や、それらに対応する現代蒙古語諸形式が全く実証されないことは、*Mo. üküdkē-* に見える *-d-(V→V)* が《瞬時体》表示の意味を内在しながら、しかも、単なる *-s-* の交替によって2次的(secondary)に生じたものではなく、あくまでも本来的(primary)なものであるということをかえって一層強く裏付ける証拠となり得るという点で非常に重要である。

3. 3. 2. 6. ツングース系言語に見えるアスペクト接辞 *-t-/ -s-*

さて、Г.М.Василевичによれば、ソ連領内の若干のツングース系言語において、deverbal verbal suffix *-t-/ -s-* (エヴェンキ語 *-t-*, エヴェン語 *-t-*, ウデヘ語 *-s-*) が動作の短いアスペクト (筆者の言う所の《瞬時体・暫時体》) を表示すると言う。²⁹⁾

以下は、エヴェンキ語の例である。

ичэ-	《видеть》	: ичэт-	《посмотреть》
	見る		パッと見る
тэгэ-	《сесть, сидеть》	: тэгэт-	《присесть》
	座る		ちょっと座る

この事実は、蒙古語に見える《瞬時体・暫時体》の意味を表示する動詞のアスペクト接辞 *-s-/ -d-* が単に蒙古語内部にとどまるものではなく、少なくとも蒙古語と満州・ツングース語³⁰⁾に共通した要素であったのではないかと推定させる。

以上、3.3.2.1.~6.の結果を総合すると、『秘史』の *üderid-* の *-d-* が《暫時体》の意味を表示していたのではないかという見解は、十分に受け入れることができよう。この場合、形態的には《暫時体》の意味を表示するdeverbal verbal suffix *-s-* の交替形と見ることも、あるいは、直接元々のdeverbal verbal suffix *-d-* と結びつけることのいずれの解釈も可能であろう。したがって、3.3.2.の見解に従えば、『秘史』の当該箇所は、次のようなニュアンスを含む文と理解できる。

---休食しに下馬した。(チンギス可汗がそこで) 少し / しばらく 休食している時に、「敵が

到れり」と言ってチギダイ、ヤディルが自分の馬を追ってやって来て、---

---үдлэн буув. (Чингис хааныг тэнд) түр үдлэж
байхад, “Дайсанирлээ” гээд Чигидай Ядир хоёр
адугаа тууж ирсэнд---

3. 3. 3. 眼前現象の強調

『秘史』のüderid-の-d-が《眼前現象の強調》の意味を表示していたのではないかという見解は、蒙古語のうち、内蒙古下位方言の口語によって支持される。

3. 3. 3. 1. 内蒙古語・下位方言³¹⁾の口語に見えるアスペクト接辞 -dä-⁴

従来、このsuffixに関し、全く報告例はないが、筆者の観察した所、これは蒙古語・ハルハ方言の口語には全く見られないが、内蒙古の若干の下位方言の口語で実際に見られるようである。以下は、筆者が観察し、収集した例である。

a) アルホルチンの口語³²⁾

• täd ug bala:ldädäd3 bə:n.

彼らが 言い争って いる

(Mo. tede üge buliya-ldu-ju bayina.)

• xəjər xu:xəd modɔ:r tʃexoldɔdɔd3 bə:sar tolgo:go:n xag tʃexɔtʃixlo:.

2人の子供が 木で なぐり合っていて 頭を ザクツと切ってしまった

(Mo. qoyar keüked modu-bar čoki-ldu-ju bayi-ysayar toloɣai-ban qaɣa čoki-čiqa-la.)

b) ホルチンの口語³³⁾

• täd tänd mər ɔraldädäd3 bə:n.

彼らがあそこで競馬をして いる

(Mo. tede tende mori uruldu-ju bayina.)

• ɔlon xu:xəd gold ɔmbalɣidäd3 bexiralɣidäd3 bə:n.

大勢の子供が 川で 泳いで 騒いで いる

(Mo. olan keüked ɣool-du umba-lča-ju barkira-lča-ju bayina.)

内蒙古語・下位方言の口語に見える動詞のアスペクト接辞-dä-⁴(-dä-/-dä-/-dɔ-/-dä-)に関し、筆者の観察した所、次のような特徴を持つことが明らかとなった。

① 形態的特徴

このsuffixは、形態的には主に相互態(cf. Mo. -ldu-²)や共同態(cf. Mo. -lča-²)等のsuffix³⁴⁾を有する若干の動詞語幹に接続するようである。(相互態や共同態のsuffixは、一般に複数概念を表示するため、このsuffix -dä-⁴は、これに呼応し、それ自身＜複数概念＞を内在しているのではないかと推定される。)

②時制・アスペクトに関する特徴

このsuffixを有する動詞の示すアスペクトは、一般には進行アスペクト(cf.Mo.-ju²/ -ču² bayi-)であり、時制に関しては、非過去の-na⁴ ~ -n(cf.Mo.-na²)や過去の-sān⁴ (cf.Mo.-γsan²)等の動詞語尾とは直接結合しない。

③意味的特徴

このsuffixは、一般に《発話者が眼前現象をより具体的に、鮮明に、しかも強調的に述べる》際に用いられるようである。³⁵⁾

以上、①,②で述べたように、上述のsuffix -dā-⁴は、形態的及び時制・アスペクトに関し、一定の条件があるものの、内蒙古語・下位方言の口語に事実認められることは非常に注目すべきことである。ただし、このsuffix -dā-⁴を、直前の動詞の語幹末子音-d-(例えば、suffix -ld-の-d-等)の単なる重複(reduplication)にすぎないと見る立場もあり得るであろう。しかし、この立場では、ホルチンの口語の第2番目の例、すなわち、直前の子音が-d-でない場合(この場合、suffix -lji-に接続している)に対し、統一的な説明ができなくなるため、ここでは、敢えてこの立場は取らないことにする。

さて、上述したsuffix -dā-⁴が、『秘史』に見える動詞語幹üderid-のsuffix -d-の直接の後身かどうかという問題は、今後の研究に委ねるとして、現段階において少なくともこの2つのsuffixの間に意味的結びつきを想定することは全くの不可能なことではないであろう。特に、動詞のアスペクトに関し、『秘史』において、üderid²ü büküi-dürの如く進行アスペクトであることは、上述したsuffix -dā-⁴の諸条件の1つ(上掲、②を指す)に合致しており、この考えの傍証となり得る可能性がある。また、これは全く推定の域を越えないが、上掲、①で述べたsuffix -dā-⁴の<複数概念>が、もし『秘史』のüderid-の-d-にも内在していたと考えるならば、問題箇所、üderid²ü büküi-dür《休食している時に》の主語は、形式的には「チンギス可汗」を指すが、意味的には「チンギス可汗を長とする陣営のめんめん」までをも含意していると考えられるべきかもしれない。

3. 3. 3. 2. 新情報との関連性

ここでは、上述したsuffix -dā-⁴の表示する意味、すなわち《眼前現象の強調》について、日本語の例を参考にしながら、さらに考察を深めることにする。

日本語では、一般に助詞「は」は旧情報を、助詞「が」は新情報を示すが、「目の前の出来事をそのまま描写する場合」に用いられるのは、後者、すなわち新情報を示す「が」の方である。³⁶⁾

・ほら、バスがやってきた。

(*は)

・あれっ、ポケットに穴があいている。

(*は)

・おや、チューリップの芽が出ている。

(*は)

さて、先に3.2.で、üderi-が旧情報を、üderid-が新情報を担っていること、また3.3.3.1.では、üderid-の-d-が《眼前現象の強調》の意味を表示していた可能性について言及したが、日本語のこの事実は、これらの事柄と全く合致しており、内蒙古語・下位方言の口語に見えるsuffix -dä⁻⁴の表示する意味を理解する上で極めて有用であると考えられる。また、先に述べたように、『秘史』のüderi-, üderid-に対し、その傍訳を見る限り、語義上の差異が全く見られないことは、この見解にとって有利である。

以上、3.3.3.の見解に従えば、『秘史』の当該箇所は、次のようなニュアンスを含む文と理解できる。

---休食しに下馬した。(チンギス可汗がそこで)休食しているまさに／ちょうどその時に、
「敵が到れり」と言つてチギダイ、ヤディルが自分の馬を追つてやつて来て、---

---үдлэн буув. (Чингис хааныг тэнд) үдлэж байх
яг тэр үед, “Дайсан ирлээ” гэвч Чигидай Ядир
хоёр адуугаа тууж ирсэнд ---

3.4. 語派生接辞(Derivational suffix)

3.3.では、『秘史』のüderid-の-d-が、動詞のアスペクト接辞(Aspectual suffix)であったと仮定し、論を進めたが、ここでは、語派生接辞(Derivational suffix)として用いられていた可能性についても言及してみたい。

3.4.1. 蒙古語に見える語派生接辞 -d-

一般に、現代蒙古語では、deverbal verbal suffix -d-は極めて非生産的であり、現在、若干ながらも認められるのは、動詞のアスペクト接辞としてではなく、語派生接辞としてである。

3.4.1.1. ハルハ方言 шигд-

蒙古語・ハルハ方言では、動詞語幹шиг-は《たくさんの箇所にはまり込む、入り込む》を意味するのに対し、その派生動詞шигд-は《ある一箇所にはまり込む、入り込む》を意味する。したがって、後者шигд-はшиг-д-と分析され、この場合、この-д-(-d-)には語幹の表示する意味を《限定(特殊化)》する働きがあると言えよう。この2種の動詞を含む次の文を参照されたい。

<шиг->

- ・ Хонины үсэнд олон хачиг шигсэн байна.
羊の 毛に たくさんの だにが 入り込んで いる
- ・ Хаврын хавсарга үлээж, элс шороо толгойн
春の 寒風が 吹き、 砂が 髪の毛の
үсээр нэг шигж гүйцлээ.
毛 一面に 入り込んで しまった

<шигд->

- ・ Машин шаварт шигдсэн.
車が 泥に はまった
- ・ Тэмээний тавхай өргөн болохоор элсэнд
ラクダの 足は 広い ので 砂に
шигдэхгүй.
はまらない
- ・ Нохойноос хүүхэд айж байшингийн буланд
犬を 子供が こわがって 建物の 隅に
шигдсэн байв.
入り込んだ

3. 4. 1. 2. ハルハ方言 улайд³⁷⁾

蒙古語・ハルハ方言では、動詞語幹улай-は単に色が《赤くなる》(=улаан бол-)を意味するのに対し、その派生動詞улайд-は、前者улай-にхал-《熱くなる》という意味を付加した、一種の複合動詞のような意味、すなわち《赤熱する(熱くて赤くなる／赤くなるほど熱くなる)》を表示する(ただし、ハルハ出身のインフォーマントより確認した所、улайд-の中心的意味は、後者хал-の方にあるという)。したがって、улайд-は улай-д-と分析され、この場合、この-д-(-d-)には語幹の表示する意味に関連した意味をさらに《付加》する働きがあるようである。この2種の動詞を含む次の文を参照されたい。

<улай->

- ・ Дулмаагийн царай ичсэндээ болоод час
ドルマーの 顔は 恥ずかしさの ために 真っ
улайжээ.
赤になった

<улайд->

- ・ Говийн элс зуны үдийн аагим халуун наранд
ゴビの 砂は 夏の 真昼の ものすごく 暑い 太陽で

улайдаж, гутлын улнаас төөнөж байлаа.

赤熱し、靴 底から 照りつけて いた

以上、3.4.1.1.及び3.4.1.2.の例より、現代蒙古語、とりわけ、蒙古語・ハルハ方言においてdeverbal verbal suffix -d-がアスペクト接辞としてではなく、語派生接辞としていかなる機能を果たしているのかについて簡単に述べた。³⁸⁾しかし、この立場から明言できることと言え、第1動詞語幹 *üderi-*から、“何らかの異なるニュアンス”を含むであろう、新たな第2動詞語幹 *üderid-*が形成されたということだけであって、*üderid-*の-d-が、仮に、上述した蒙古語・ハルハ方言のように、《限定(特殊化)》や《付加》の意味を表示していたとしても、それが具体的にどんなニュアンスの違いを意味するのか特定できないので、ここでは、あくまでも解釈し得る可能性の1つとして呈示するにとどめたい。

これまでは、『秘史』に見える*üderi-*、*üderid-*のうち、前者*üderi-*を基本形と見る立場から分析し、考察を進めてきたが、今度は、後者*üderid-*を基本形と見る立場から分析し、その可能性について検討を加えたい。

4. *üderid-*を基本形と見る立場

18世紀初頭に書かれた *Qorin nigetü tayilburi toli*(『二十一卷本辞典』)では、現在、蒙古語に見える、例えば、

мөрлөх (Mo. *möröle-*) 《肩にかつぐ》

шимшрэх (Mo. *simsire-*) 《骨がうずく、激痛する》

に相当する語が、それぞれ、

möröled- / *aliba yaɣuma-yi mörön-dür tošču ergüküi-yi möröledümüi kememüi.*

何かあるものを肩 に 受けて持ち上げることを *möröled-ü-müi*と言う

simsirid- / *yasu üye ebedküi-yi simsiridümüi kememüi.*

骨・節が 痛むことを *simsirid-ü-müi* と言う

と見え、蒙古文語のように*möröle-*、*simsire-*は、当該の辞書では立証されない。このことは、1つの可能性として語幹末子音に-d-を有する動詞のうちのあるものは、歴史的にその語幹末子音が脱落したのではないかということを示唆するものである。

4. 1. *üderid-*の語構成分析

*üderid-*を基本形と見る立場に立つならば、この語は*üde*《正午、真昼》(N)-r(N→N)-id-(N→V)と分析するのが妥当であろう。なお、この形態分析は、以下の並行例によって十分支持される。

a)denominal nominal suffix -r

Mo. *ide* 《力、エネルギー》> *ider* 《若い、青年の》

möči 《四肢》 > möčir 《枝》

bayan 《富》 > bayar 《喜び》

b)denominal verbal suffix -id-(cf.Мо.-(y)id-)³⁹⁾

Мо. nere(н э р) 《名前》 > nereyid-(н э р и й д-) 《名づける》

『秘史』：額不₂兒(ebür) 《懷》 > 額不₂里₁-(ebürid-) 《懷に入れる》

したがって、この立場に従えば、『秘史』のüderid-の末尾の-d-は、deverbal verbal suffixではなく、denominal verbal suffix -id-に属する所の、単なる動詞語幹末要素に過ぎず、この語幹末子音-d-の脱落した形式が、すなわち、『秘史』に見えるもう1つの形式üderi-であると解することができる。

4. 2. 『秘史』üderi-/üderid-と蒙古語üdele-(ү д л э-)との語形成関係

ここでは、『秘史』に見えるüderid-を基本形と見る立場から、『秘史』üderi-/üderid-と蒙古語üdele-(ү д л э-)の両者に語形成上どのようなつながりがあったのかについて論じてみたい。

4. 2. 1. 『秘史』üderi-の交替と見る解釈

先ず、4. の立場に従えば、『秘史』のüderi-, üderid-に対し、蒙古祖語に*üderid-を想定することができる。さて、『秘史』でüderid-, üderi-の両形が立証されることに對し、筆者は、中世蒙古語において、すでに蒙古祖語*üderid-の語幹末子音-d-の脱落が生じ始め、『秘史』で代表される時代がまさにその変化の過渡期にあったためだろうと考える。その後、語幹末子音-d-が完全に脱落し、üderi-という1形式で安定した時期がおそらく存在したものと推定されるが、近世から現代にかけてdenominal verbal suffix -la-²という派生法が極めて生産的になったのに伴い、名詞語幹üdeに直接、-le-(N→V)を付加した語構成、すなわち、üde-le- > üdele-が主流を占めるようになり(18世紀初頭の『二十一卷本辞典』では、すでにüdele-と見える)、従来のüderi-(< üde-ri- < üde-r-id-)を駆逐してしまったのであろうと解釈することができる。これは、いわば、『秘史』üderi-の交替として蒙古語üdele-が発展したと見る解釈である。

4. 2. 2. 『秘史』üderid-の交替と見る解釈

上述の解釈に対し、考え得るもう1つの解釈は次のようである。先ず、蒙古祖語に*üderid-を想定し、『秘史』のüderi-は、その語幹末子音-d-の脱落した形式であると見る点は全く同じだが、異なるのは、一言で言えば、2つのdenominal verbal suffix -(y)id-及び-la-²に着目する点である。蒙古語では、一般にsuffix -(y)id-は、極めて非生産的で化石化しているのに対し、suffix-la-²は、それとは対照的に極めて生産的である。さて、ここで最も注目すべき事実は、suffix -(y)id-は、通常suffix -la-²と交換可能だという

ことであり(ただし、その逆は当てはまらないことに注意)、現在では、両者とも実証されるものもあれば、後者しか実証されないものもある。4.1.b)で掲げた例を、再度ここで参照されたい。

- | | | |
|------------------------------|---|-----------------------|
| <-(y)id-系> | | <-la ⁻² 系> |
| ・『秘史』/Mo. nere- <u>vid</u> - | ~ | Mo. nere- <u>le</u> - |
| > 蒙古語 н э р и й д - | | > 蒙古語 н э р л э - |
| ・『秘史』ebür- <u>id</u> - | ~ | Mo. ebür- <u>le</u> - |
| > 蒙古語 --- | | > 蒙古語 ө в ө р л ө - |

特に、後者の例で、-(y)id-系、すなわち、『秘史』ebürid-は現在では全く実証されず、現在実証されるのは-la⁻²系、すなわち、Mo. ebürle-(ө в ө р л ө -)(さらに、Mo. ebürtüle-(ө в ө р т л ө -)という形式もある)の方である。したがって、以上の2例より、『秘史』のüderid-(< üde-r-id-)に対し、時代的には特定できないが、少なくともその後の交替形(あるいは発展形)として*üderle-(< *üde-r-le-)を想定することは十分容認されるであろう。しかも、これがその後、*üderle- > üdele-と音変化し、徐々に発展するのに伴い、üderid-の方は、その逆に徐々に廃語化し、ついには、üdele-がüderid-の位置を占めるようになったものと解釈することができる。

- | | | |
|-------------------------|---|------------------------------|
| ・『秘史』üde-r- <u>id</u> - | ~ | *üde-r- <u>le</u> - |
| > 蒙古語 --- | | > Mo. üdele- > 蒙古語 ү д л э - |

これは、言わば、『秘史』üderid-の交替として蒙古語üdele-が発展したと見る解釈である。一方、語幹末子音-d-の脱落した、『秘史』のもう1つの形式 üderi-の方は、üdele-(< *üderle-)の台頭に伴い、『秘史』のüderid-とともに徐々に勢力を失い、ともに消滅してしまったのであろう。なお、近代蒙古語の一端を反映している、18世紀初頭の『二十一卷本辞典』では、上述した、『秘史』の-(y)id-系の3語(nereyid-, ebürid-, üderid-)は、すべて-la⁻²系(nerele-, ebürle-, üdele-)で現れており、このことは、-(y)id-系から-la⁻²系への移行が当時すでに終了したことを反映しているものと解釈できる。

以上4.2.1.及び4.2.2.の解釈は、それぞれ次のようにまとめることができる。

<4.2.1.の解釈>

蒙古祖語	『秘史』の時代	近世	現代
*üderid-	→ üderid-~üderi-	→ üderi-	→ ...→ ∅
		→ üdele-	→ ү д л э -

<4.2.2.の解釈>

蒙古祖語	『秘史』の時代	近世	現代
*üderid-	→ üder <u>id</u> -	→ ...→ *üder <u>le</u> -	→ üdele- → ү д л э -
	~üderi-	→ ...→	→ ∅

4. 3. この立場に対する問題点

-- 特に、蒙古文語にのみ見える -d- 語幹動詞の分析を通して --

蒙古文語の辞書類、例えば、F.D.Lessing, Mongolian-English Dictionary(1960)では、次のような動詞対が見られる。

Mo. 蒙古語

a)・emgeni- (эмгэнэх) 《vi. To worry, be in mourning, grieve---.》

emgenid- (---) Same as emgeni-

b)・janu- (эанэх) 《vt. To threaten, menace;---.》

janid- (---) Same as janu-

・simsire- (шимшрэх) 《vi. To feel a gnawing pain.》

simsirid-(---)⁴⁰⁾ 《vi. To feel pain; feel pain in one's bone.》

ここで、これらの動詞対の、それぞれ後者、すなわち、語幹末に -d- を有する動詞が、現在、蒙古語において立証されないことから、先の 4. 2. で見たように、後者を前者の前身と見なし、歴史的に語幹末子音 -d- の脱落によって前者が形成されたと推定することは可能であろう。しかし、ここで問題となるのは、特に、b) の動詞対の、それぞれ後者(janid-, simsirid- を指す)において、-d- の直前の母音(-i-)が、なぜ前者の語幹末母音(janu-, simsire- の -u- / -e- を指す)と異なるのかという点である。これは非常に興味深い問題であり、もし、この -d- を語幹末子音と見なし、歴史的に脱落したとする立場に立つならば、

janid- → *jani- /*jana- /janu-

simsirid- → *simsiri-/simsire-/*simsirü-

(cf. emgenid- → emgeni- /*emgene-/*emgenü-)

のように、-d- が脱落した後の動詞語幹末母音を決定することは不可能で、前者において -u-、後者において -e- を選択する根拠がなくなるため、この立場を全面的に支持することができなくなる。

これに対し、この -d- を suffix (正確には、deverbal verbal suffix) と見なし、後者を前者の派生語とする立場に立つならば、

janu- → janid-

simsire- → simsirid-

(cf. emgeni- → emgenid-)

となり、この場合、-d- の直前で母音変化(V→-i-)が生ずる音声的環境はまず考えられないから、形態的立場から、-d- の直前に suffix -i- が遭遇していると考えらるべきであろう。⁴¹⁾ なお、この suffix -i- に関しては、現在の所、筆者は、《動作の単発性、一回性》を表示する suffix⁴²⁾ と同一のものとする。

以上の結果、先に掲げた蒙古文語の動詞対 a), b) の例を統一的に説明するには、語幹末の -d- を deverbal verbal suffix と見なし、後者を前者の派生語とする立場の方がより説得力

があるように思われる。⁴³⁾ しかも、この立場に従うならば、これらの動詞対の後者、いわゆる-d-語幹動詞は、一般にかなり非生産的で、しかも、前者とは極めて微妙に異なるニュアンスの違いを表出したために、徐々に化石化し、ついには、派生語として現在にまで定着することなく消滅したものと説明することができる。しかしながら、その“極めて微妙なニュアンスの違い”とは一体全体何であったのかという最も関心あるテーマ(例えば、それがアスペクト接辞だったのか、語派生接辞だったのかという問題までをも含む)に関しては、実際にこれらの語が、一体いつの時代のどの文献で、しかも最も重要なのは、どのようなコンテキストの下で現れているのかを、ひとつひとつ厳密に検証しない限り、現在の所、確固たる結論を出すわけにはいかないであろう。⁴⁴⁾ これは今後に残された大きな課題の1つである。ただ、ここで強調したいことは、以上の議論は、『秘史』に見える üderi-, üderid-のうち、後者üderid-を基本形と見る立場よりも、前者üderi-を基本形と見る立場にとって有利であるということである。

5. おわりに

『蒙古秘史』には、現在では全く実証されない、üderi-/üderid-という2つの動詞語幹が見え、この2つが当時一体いかなる意味の違いを示していたか、特に、末尾の-d-をどのように解釈すべきかについて、ここでいくつかの見解を提出した。

本文では、先ずüderi-を基本形と見る立場、次にüderid-を基本形と見る立場から、それぞれ考察を進めたが、分析の結果、後者よりも前者にとって有利であることが明らかとなった。しかも、前者の立場に従う場合、末尾の-d-(すなわち、deverbal verbal suffix -d-)が、さらにアスペクト接辞か語派生接辞かで見解が分かれ、アスペクト接辞の場合、少なくとも①《完成体》、②《暫時体》、③《眼前現象の強調》のいずれかの意味を、また語派生接辞の場合、厳密にはその表示する意味は不明だが、あくまでも1つの可能性として、①《限定(特殊化)》、②《付加》等の意味を表示することが、蒙古語族の諸言語及び諸方言の分析を通して、明らかとなった。特に、アスペクト接辞の場合、上述したように、3つの可能性を指摘するには成功したものの、『秘史』の当該箇所コンテキストにおいて、そのいずれの可能性が最も大きいかに至るまでは、今回明らかにすることができなかった。ただし、蒙古語族の、現在の特定の1言語ないしは1方言だけではなく、蒙古語内部の語構成全般から支持されるのは、おそらく②《暫時体》の見解であろうか。この点は、今後、別の観点からもさらに検討を加え、いずれ解決しなければならない問題である。

『秘史』の時代の、当時の意味の復元は、極めて困難な問題であるが、言語の内的再構によってその意味を推定することは、蒙古語の形態論研究にとって極めて意義あることと考える。

6. 附録

ここでは、本文の内容に関連して、『蒙古秘史』に見える若干の動詞語幹について、さらに検討を加えることにする。

6. 1. 『秘史』の動詞語幹 qal-/qalid-

『蒙古秘史』には、qal-/qalid-という2つの動詞語幹が見える。

先ず、前者qal-は、『秘史』では計5回現れ、例えば、巻3、111節では次のように《近づく》の意味で用いられている(ただし、傍訳《惹》に従うと《手を出す(←近づく)》の意味にも解される)。この場面は、かつてイエスゲイ・バアトルにホエルン(後にテムジンの母となる)を略奪されたメルキド族が、その仇討ちとしてテムジンの妻ボルテを捕え、チルゲルにその夫人の世話をさせたが、テムジン率いる兵に追われ、嘆きながら逃走する場面である。この文の主語はチルゲルであり、后夫人とはテムジンの妻ボルテのことである。

(§ 111)… 中合塔舌児 卯危 赤勒格舌児 必 中合屯兀真途舌児 中合勒中忽孛命
qatar mau'üi Čilger bi qatun üjin-dür qalqu bolun
--- 不幸な チルゲル 私は 后 夫人 に 近づくとになり、
中合木黒 蔑舌児乞楊帖 渾討兀 …
qamug Merkid-te huntau'ü
すべてのメルキド族に 禍(となった)---

この語は、蒙古文語及び若干の現代語の辞書類にもそのまま実証される。

(二十一卷本) qala- / oyira odqui-yi qalamui kememüi.

近くに行くことをqala-muiと言う

(Ⅲ) qal- / qaldaqu(qalju ečikü) qalqu-yin

qaldaqu(近づいて行く) qalqu の

(L) qal-(х а л а х)《vi. To come near, approach;---》

(Ц) х а л а х III/1. ой р т о х , х а л д а ж о ч и х ;---

近づく 近づいて 行く

х а л ж о ч и х (ой р т о н о ч и х)

近づいて 行く

また、満州文語にもこの動詞語幹の痕跡が見られる。

Ma. xalana-(< xala-na-《～しに行く》 < gene-《行く》)

《1.(省略)、2.近づく、近づきになる、親しくなる》

一方、後者qalid-は、『秘史』では1回現れ、これまた《近づく》の意味で用いられて

いる(なお、傍訳は《親近》である)。場面は、『秘史』の巻8、201節で、チンギス可汗の宿敵となったチャムカが、かつてテムジン(後のチンギス可汗)とアング(盟友)の契りを結んでおきながら、それを破ったことに自らを恥じている場面である。この文の主語はチャムカである。

(§ 201)… 中合⁵刺你兀⁶里顔 中合兀⁷答(中灰)阿察 中合里敦 牙丹 中罕
 qara ni'ūr-iyān qa'ūldaqui-ača qalidun yadan qan
 ---黒い 自分の面を はがされることから 近づき かねて、可汗なる
 安答亦顔 中合刺温 赤⁸来 兀⁹ 牙答周 逐步罷者 必…
 anda-iyān qala'ūn čirai üjen yadažu yabuba je bi.
 自分の盟友の暖かい 顔を 見ることが できないで いたのだ、私は。---

ここで、問題の中合里敦(qalidun)は、筆者の考えでは、qalid-u(介入母音)-n(非分離・副動詞語尾)と分析され、ここに動詞語幹qalid-⁴⁵⁾が抽出されるが、これに対する蒙古文語形は全く実証されず、⁴⁶⁾ただ、現代語のダグール語とブリヤート語でその後身が見られると言う。⁴⁷⁾

(ダグール語)kalid-, kalli-《①催、逼 ②靠近》 e.g. duse:ji kallidz saodzabai.
 促す 迫る 近づく 壁 に 近づいて座っている
 なお、kalli-の方は、qalid- > kaldi- > kalli-の如く変化したものであろう(cf.ダグール語 oldo:n ~ ollo:n《隣(の)》)。

(ブリヤート語)хальдаха《придираться, взъедаться》
 けちをつける、言いがかりをつける くってかかる、しかりつける
 なお、ブリヤート語の意味に対しては、《近づく》→《迫る、言い寄る》→《けちをつける、くってかかる》のような意味の変化過程を想定し、説明することは十分可能であろう。

さて、いよいよ本論に入り得る段階となったので、ここで、『秘史』に見える qal-/qalid-の両者を、形態及び意味の点から考察してみることにする。

まず、両者は形態及び意味的に極めて類似していることから、同一語幹語ではないかと考えられる。この考えに従うならば、後者qalid-は、qal-i-d-と分析され、qal-は前者qal-、すなわち《近づく》を意味する動詞語幹、-i-は《動作の単発性・一回性》を表示するsuffix、-d-はdeverbal verbal suffixと解することができる。なお、qalid-をqal-i-d-と分析する妥当性に関しては、本文4.3.で述べた事柄(-d-をsuffixと見なす考えの箇所)から十分支持を得ることができる。

次に、『秘史』のqalid-に見えるdeverbal verbal suffix -d-をいかに解釈すべきかという問題に移ることにする。これに関しては、動詞の何らかのアスペクトを表示しているという前提に立つならば、本文の3.3.で論じたように、deverbal verbal suffix -d-は、

少なくとも3.3.1.《完成体》、3.3.2.《暫時体》、3.3.3.《眼前現象の強調》の意味が考えられるが、このうち、『秘史』の巻8、201節のコンテキストに最も適していると思われるのは、おそらく《暫時体》の意味であろう。したがって、1つの可能性として、『秘史』の当該箇所は、次のようなニュアンスを含む文と理解できよう。

---黒い自分の面をはがされることから(チンギス可汗、おまえに)しばらく(の間)近づきかねて、可汗なる自分の盟友(すなわち、チンギス可汗、おまえ)の暖かい顔を見ることができないでいたのだ、私は。---

つまり、筆者の考えでは、『秘史』に見えるqalid-を、形態的にqal-《近づく》-i-《単発性・一回性》-d-《暫時体》と分析し、さらに意味的には、チャムカがチンギス可汗に《完全に近づきかねていたのではなく、しばらく(の間)／一時的に近づきかねていた》と理解することは全くの不可能ではないと考える。しかも、この立場に立つと、『秘史』のqalid-は、形態的には、現在のダグル語及びブリヤート語においてほぼそのまま保持されたものの、意味的には、『秘史』の時代の、当時のアスペクト接辞としての意味が失われてしまい、当該言語では、語派生接辞としてのみ発展するに至ったと説明することができよう。

6. 2. 『秘史』の動詞語幹 兀里思-

『蒙古秘史』の巻12、277節には、兀里思-という動詞語幹が見える。この場面は、オゴデイ可汗が彼の息子グググに対し、彼の言動を強く戒めている場面である。

(§ 277)…你刊帖 格^舌児帖徹 中合^舌児拙 牙兀別^舌児 中合^黒察阿^舌児

nikente ger-teče garču ya'ū-ber gaḡča'ār

----一度 包(パオ)から出て、 何でも ただ一人で

秃你^黒三箴圖 兀格 擣兀 兀里思拙 亦^舌列周 赤…

tunigsan metü üge dau'ū ulisču irejü či

成し遂げたように 言葉・声を 張り上げてやって来て、 おまえは。---

ここで、『秘史』に見える動詞語幹、兀里思-をどのように解釈すべきか、特に、現在のいかなる語と比定すべきかに関しては、従来種々の見解があり、今の所、まだどれも定説となるには至っていない。

例えば、額爾登泰、阿爾達扎布⁴⁸⁾は、『秘史』の原文、兀里思-を兀^舌里思-と校訂しているためであろうか、この動詞語幹をMo. öris-, 蒙古語 $\Theta p c \Theta x$ 《競う、争う》と比定し、öris-と読んでいるようである。ただし、第2字の里(li)を^舌里(ri)と校訂する可能性は否定しないとしても、第1字の兀は、本来、円唇・高母音u/üを表記するための漢字(e.g. 兀納-(una-)《落ちる、倒れる》、兀者-(üje-)《見る》etc.)であるから、öris-

はなく、üris-と読んでいる可能性もある。

また、巴雅爾⁴⁹⁾は、この語をulis-(ulis-ではない)と転写しているが、それが現在のいかなる語に相当するのか記されていないので、それをどのように解釈しているのか、これだけからは判断しかねる。

これに対し、小沢⁵⁰⁾は、この語をulis-と転写し、《(狼、犬等が)遠吠えする》を意味する uli-(улих)と関係ある語幹と考え、その結果、『秘史』の兀里思-に対し、《---言葉・声をわめいて---》の如く《わめく》という訳語を与えている。

以上、『秘史』の動詞語幹、兀里思-に関し、特に、形態的立場から種々の見解があることを簡単に述べた。

さて、以下で筆者の見解を述べることにする。先ず、形態的に見た場合、『秘史』の兀里思-がたとえ『秘史』でのみ実証されるとしても、もし蒙古系の、既存の何らかの語と関連づけて考えるとするならば、筆者は小沢と同じ見解で、兀里思-を ulis-と転写し、Mo. uli-(улих)《(狼・犬等が)遠吠えする》⁵¹⁾と比較すべきであると考え。したがって、『秘史』の ulis-は、形態的には uli-s-と分析され、uli-は《遠吠えする》を意味する動詞語幹、-s-は *deverbal verbal suffix* と解することができる。

次に、意味的に見た場合、『秘史』の兀里思-の兀里-(uli-)は、本来動物に対して用いるべき語でありながら、それを敢えて人間に対して用いた、一種の擬人法であり、このことは、裏を返せば、この文の発話者オゴデイ可汗が彼の息子グユグをいかに強く非難しているのかを表わした表現と言えよう。したがって、ここでは、ulis-の uli-を、《(動物が)遠吠えする》という本来の意味から転じて、《(人間が)声を張り上げる》ぐらいの意味に理解すべきものとする。 ⁵²⁾ さて、ここで問題となるのは、ulis-の -s-(*deverbal verbal suffix*)を意味的にどのように解釈すべきかという点である。これに対し、小沢⁵⁰⁾は、「ulis-の -s-の要素が如何なる意味をもつ要素か判然としないが、恐らく、動作の継続・持続の何等かの様態を示す要素であろう。」(原文のまま引用、ただし、波線は筆者加筆)と述べる。一方、筆者は、これまで蒙古語内部の分析を通して、*deverbal verbal suffix* -s-が少なくとも①《瞬時体》、②《暫時体》の意味を表示し、両者はともに<時間的制限の行為>を表示する点で、1つの意味範疇に属するアスペクトである⁵³⁾と論じてきたが、このうち、『秘史』の巻12、277節のコンテクストに最も適していると思われるのは、おそらく《瞬時体》の意味であろう。したがって、1つの可能性として、『秘史』の当該箇所は、次のようなニュアンスを含む文と理解できよう。

---一度包(バオ)から出て、何でもただ1人で成し遂げたように、言葉・声をいきなり／突然／急に張り上げてやって来た、おまえは。---

最後に、筆者は、かつて『秘史』の巻1、56節に見える動詞語幹、脱斡乞思-(tolki-s-)の -s-に対しても、《瞬時体》の意味を表示していた可能性がある⁵⁴⁾と論じたことを付記しておく。

註

*本稿は、1991年8月29日から9月4日にかけて中国・呼和浩特で行われた内蒙古大学第二次蒙古学国際学術討論会・言語部会の席上、口頭発表した原稿(同年6月に同組織委員会に郵送)をもとに執筆したものである。ちなみに、その原稿は、“《Монголын нууц товчоон》 дахь үйл үгийн 兀迭 里 福(üderid-) үндэст байгаа -d- ийн тухай”(蒙古文)『内蒙古大学第二次蒙古学国際学術討論会・語文』(1991)pp.1205-1212. 中国・呼和浩特に掲載されている。なお、本文及び註の例文(蒙古文)作成に際し、快く協力してくださった、筆者のモンゴルの友人、Л.Энх-сайханさん及び大阪外国語大学モンゴル語学科客員教授、Д.Отгонсүрэн先生にここに記して心から感謝の意を表したい。

1)例えば、マンサンによれば、『秘史』の原文の当該箇所は現代蒙古文語で次のように翻訳されている。(満昌『新訳注釈《蒙古秘史》』(蒙古文)(Mansang, Sine-ber orčiγulju tayilburilayсан 《Mongγol-un niγuča tobčiyān》)(1985)内蒙古人民出版社 呼和浩特)

--- činaysi mordan yabuysayar marγasi ni üde-yin naran-iyar qara qaljid-un elesü kürčü üdelekü-ber baγuba. tende üdelejü bayitala alčidai-yin aduγuči čigidai, yadir qoyar aduγu-ban sebegün noγoyan-du saγuri saγuri-bar aduγulan yabuγu bayitala genedte aru mau öndör-ün öbör-iyer ulayan burγasu-yi dayarin irekü dayisun-u toγosu-yi üjeγü 《dayisun irele》 geγü aduγu-ban šalabdan taγuγu ireγü medegülbe.---

2)suffixの右肩の数字は、母音調和による異形態の数を示す。例えば、Mo.-ju²/-ču²は、-ju~-jü/-ču~-čüを意味する。

3)Mo.üdele-(蒙古語 үдлэх)に対しては、従来の辞書類には次のように見える。
(二十一卷本) üdele- / jam-dur yabuqu jaγura budaγalaqui-yi üdelemüi kememüi.
旅 に行く 途中 食事をするを üdele-müiと言う。

(Ⅲ) üdele- / üde-dür idegen idekü.

正午に 食べ物を食べること

(L) üdele-(үдлэх)《vi.To camp at noon for a meal;to have a noon rest when traveling.》

(Ⅱ) үдлэх / 1.аян замын хүний үдийн хирд

旅 人の 正午 頃

буудаллан хооллож ундлан амрах.

宿営し 食事をし 飲んで 休息すること

(蒙漢) üdele- / 《[不及]① 歇晌 ②吃午饭、打尖》

昼休みをする 昼食を食べる (旅人が)食事(休息)をとる

以上の結果、üdele-(үдлэх)は、《(旅人が)道中昼食を食べ休息をとる》ことを意味する動詞語幹であることがわかる。また、この語は例えば、蒙古語(ハルハ方言)で Замдаа хаана үдлэх вэ? 《途中どこで休みますか》(Монгол-япон ярианы дэвтэр (『蒙日会話集』)(1990) p.235. Улаанбаатар.)のように用いられる。なお、本文では、便宜上、小沢(1987)に従い、《休息する(休み食する)》という訳語を統一的に用いた。

4)Ц.Дамдинсүрэн, Монголын нууц товчоо (1976)
Улаанбаатар.

巴雅爾『蒙古秘史』(上、中、下三冊)(蒙古文)(Bayar, Mongᠭol-un niᠶuᠴa tobčiyān (neyite ḡurban debter))(1981) 内蒙古人民出版社 呼和浩特

満昌『新訳注釈《蒙古秘史》』(蒙古文)(Mansang, Sine-ber orčiyulju tayilburilaysan 《Mongᠭol-un niᠶuᠴa tobčiyān》)(1985) 内蒙古人民出版社 呼和浩特

額爾登泰、阿爾達扎布『蒙古密史還元注釈』(蒙古文)(Eldengtei, Ardajab, Mongᠭol-un niᠶuᠴa tobčiyān --- seyiregölöl tayilburi)(1986) 内蒙古教育出版社 呼和浩特

5)小沢はこの点について次のように述べている。

「---なお、üderi-とüderid-の間には何等かの意味の違いが存するであろうが、目下
処、筆者はそれを明らかにし得ない。」(原文のまま引用)(小沢重男『元朝秘史全訳続
攷(上)』(1987)p.23.註(7) 東京)

6)deverbal verbal suffix -d-は、単に『蒙古秘史』にとどまらず、中世のアラビア字蒙古語文献『ムカディマツト・アル・アダブ』においても、suffix -t-によって確認される。
例えば、同文献では、次のようにböllä-/böllat-という2つの動詞語幹が見える。

(122)böl -- Ч. qul

奴隸 《раб》

(122)böllä·ba tün-i -- Ч. qullandī anī

奴隸にした 彼を 《получил его в рабы》

(123)böllat·ba bōl-i -- Ч. qullandī qulnī

奴隸にした 奴隸を 《получил раба в рабы》

ここで、前者böllä-は、böl《奴隸》-la-(N→V)と分析され、《奴隸にする》を意味する(ただし、この動詞は、現在では全く実証されず、形態及び意味的にこれに相当するのは、Mo. boḡolčila-、蒙古語б о о л ч л о хである)のに対し、後者böllat-は、さらにbōl-la-t-(V→V)と分析され、ここにdeverbal verbal suffix -t-が抽出される。しかし、ここでsuffix -t-が当時一体どんな意味を表示していたのか、現在知ることは極めて困難である。

7)これに対し、小沢は、実詞üde《正午、昼休み》と同時に、現在実証されない動詞*üde-《昼休みをする》の存在を仮定した上で、『秘史』に見える2つの動詞üderi-, üderid-が

実詞からではなく、この動詞からの派生語ではないかという見解を示している。(小沢 前掲書p.23.)しかし、いずれの立場に立つにせよ、本稿の目的は、『秘史』に見える *üderi-*, *üderid-* の語構成分析にあるのではなく、あくまでも両者の意味的差異が何であるのかにあるので、何ら筆者の論点の妨げとなるものではないことを付記しておく。

8) 筆者の仮定した **üdere-* の *-re-* は、蒙古語ではかなり生産的な自動詞を形成する *denominal verbal suffix* である (cf. *Mo.-ra-/-re-*)。

e.g. *manan* 《霧》 > *manara-* 《霧がかかる》

kögečü 《かび》 > *kögečüre-* 《かびが生える》

jibe 《さび》 > *jibere-* 《さびる》 etc.

また、*üderi-* の語幹末の要素 *-i-* は、小沢の言う所の《動作の単発性、一回性》を表す *suffix* であると考える。

-i- 〈動作の単発性〉 : *-yu-², -qu-², -gi-* etc. 〈動作の持続性〉

e.g. *bür-i-* 《おおう》 : *bür-kü-* 《曇る(←持続的におおう)》

qal-i- 《液体がこぼれる》 : *qal-gi-* 《液体がこぼれつつける》

qaltu-r-i- 《滑ってころがる》 : *yul-yu-* 《持続的に滑る》

(小沢重男『モンゴル語と日本語』(1978)p.164,166,244,258,275,311.東京)

9) 保安語は大きくは次の2つの下位方言からなる。

1. 同仁方言---中国・青海省同仁県の保安下庄・年都乎・郭麻日・尕酒日に分布する。この地域の住民は自らを土族(*her mæɾəŋ*)と称し、約4千人居住する。

2. 大河家方言(別名、積石山方言)---中国・甘肅省積石山保安族東郷族撒拉族自治县大河家郷の大墩・甘河灘に分布する。この地域の住民は自らを保安(*bə:ŋan*)と称し、約9千人居住する。

10) 陳乃雄『保安語和蒙古語』(1987)pp.238-239. 内蒙古人民出版社 呼和浩特
保安語の完成体接辞は、その他、次の場合に用いられる。

1. 動詞語幹の直後に命令形として

(年) *tçi mənə petçisənə udzidzi tagena ɡəsa kurgeɡata.*

(対格)

(仮定)(使役)(完成体)

あなたが私の書いたのを見てよいと言うなら人に届けさせろ

(下) *tçi ndʒandə kəldə.*

(与位格)(完成体)

あなたは彼に言ってしまえ

2. 過去語尾 *-ə* とともに

(年) *nəɡə kuŋ ʁadzite.*

(*<-tə*(完成体)-*ə*(過去))

あの人は行ってしまった

(下) məsgənə ʰa:du ?

(対格)(<-də(完成体)-ə(過去)-u(疑問))

服を縫ってしまったか

3. 懸念を表示する動詞語尾、(年)-gua(<-gə+wa), (下)-gə wa(意味的にはMo. -γuʝai /-güʝeiに相当する)とともに

(年) bə nda:təgua.

(下) bə nda:dəgə wa.

私は遅れてしまうかも(遅れてしまうのでは)

11)Б.Ринчен, Монгол бичгийн хэлний зүй, гутгаар дэвтэр (1966)р.66. Улаанбаатар.

Л.Мишиг, Орчин үеийн монгол бичгийн хэлний дадлагын хэл зүй (1978)р.159. Улаанбаатар.

12)道布『蒙古語簡志』中国少数民族語言簡志叢書(1983)р.47.民族出版社 北京

13)Б.Ринчен 前掲書 р.66

14)一般に、元々の複合形式(副動詞語尾+助動詞)が接辞化(単純形式化)していく様子は、蒙古語よりも中国・甘肅省の蒙古系孤立言語である東部裕固語において一層明確となって現れる。東部裕固語では、動詞の完成体は、その1つの方法として動詞語幹(V)+結合副動詞語尾-(g)a:⁴に助動詞(動詞)ɔd-(Mo. od-)《行く》を後続させて表示するが、この場合、通常はɔd-の初頭母音ɔ-を脱落させ、直前の副動詞語尾とともに、あたかも一つのsuffixであるかの如く、V-(g)a:d⁴-(< V-(g)a:⁴ ɔd-)の形式でもって表示する。

• tere la gərtə jaβga:dsan be. 彼は家に行ってしまっただろう

(強調)

(cf. Mo. tere gertü yabuɣad oduysan bui.)

• tʃənə tʃeg tu:ma la harβan fən tərgeɖe:dtʃ ʔai. 君の時計は10分進んでいる

(強調)

(cf. Mo. činu čay toɣalama arban fün türgeɖüged odčai.)

tʃeg tu:ma は、文字通り《時を数えるもの》→《時計》の意味。なお、tu:maは、同言語 tu:lamaの簡略形。

• mənə tergen ʃβar htɔɔɔ ɔɔgɔ:dtʃ ʔai. 私の車が泥の中にはまってしまった

(cf. Mo. minu tergen sibar dɔɔɔɔɔ ɔɔɣad odčai.)

なお、東部裕固語の結合副動詞語尾-(g)a:⁴は、形態的にはMo.-γa/-ge(不完了・形動詞語尾)に対応するが、機能的には形動詞語尾ではなく、専ら副動詞語尾として用いられることに注意したい。また、東部裕固語では、さらに、これに類似した形式として-(g)a:du⁴があるが、これはMo.-γad/-gedに対応する先行(順序)副動詞語尾であり、上述の完成体形式とは全く異なるものである。

東部裕固語の例文は、次の本から引用した。保朝魯、賈拉森『東部裕固語話語材料』(1988)p.9,45,48.内蒙古人民出版社 呼和浩特

15)本文では、形態的観点から『秘史』に見えるsuffix -d-と蒙古語の-tix-(-ti-)を全く異源形のsuffixとして扱えたが、考えようによっては、音声的観点から『秘史』に見えるsuffix -d-が蒙古語の完成体接辞-ti-の前身であったのではないかという考えも一応成り立つであろう。つまり、Mo. od- : Mo. oči-《行く》やMo. ödken : 東郷語 otçiban《濃い》等の若干の対応例より、次のような順序の音変化、

①-d- > -t-/_.

②-t- > -č-/_i

すなわち、元来のdが音節末で無声化した後、母音iの添加に伴い口蓋化が生じたと想定することは可能である。しかし、この立場では、蒙古語の完成体接辞-tix-, -ti-のうち一方だけしか説明できなくなるため、この考えを全面的に支持するわけにはいかない。

16)塩谷茂樹「蒙古語におけるdeverbal verbal suffix -s-について」『言語学研究』第8号(1989)pp.53-84.京都

17)このことは、ハルハ出身のインフォーマントより確認された。ただし、ハルハ方言の辞書類には、халсахという語があるが、これは《(少し)酔う》ではなく、《避ける、臆する》の意である。なお、これに対する蒙古文語形は、qalus-(内蒙古の『蒙漢』でも、qalus-《躲閃、惊閃》と見える)であり、本文で述べた内蒙古方言のxalsax(これに対する蒙古文語形はqalasa-)とは同音異義語の関係になる。

18)内蒙古アルホルチン出身の友人が筆者に宛てた私信には、次のように書かれている。

arikindu galasala. --- enekü üge-yi tung olan kereglene. egün-ü aɣulɣa bolbal

この言葉を非常に多く用いる この内容は

ariki uuɣuɣad neliyed boluɣsan arai soɣtoɣodüi üyes-i kelene.

酒を飲んで かなり になったが、まだ 酔っていない頃を 言う

19)このことも、ハルハ出身のインフォーマントより確認された。ただし、ハルハ方言でこれにほぼ相当する意味を表示するには、動詞цалгихの語幹にsuffix -с-[-s-]ではなく、suffix -схий-を付加し、цалгисхийх(~бага зэрэг цалгих)の如く表現することは可能であると言う。

e.g. Хултай айраг цалгисхийтэл дуулав.

お碗に入った アイラグが(揺れて)少しこぼれるほど 歌った

20)蒙古語の自動詞・他動詞両意語幹には、例えば、эхлэх《始まる／始める》、дуусах《終わる／終える》等がある。

Ажил эхлэв.

Бид ажлаа эхлэв.

仕事が 始まった

私たちは 仕事を 始めた

Манай давс дууссан. Манайх давсаа дууссан.

うちの 塩が 切れた うちが 塩を 切らした

21)以上の考えを要約すると、『ム』で代表される、中世蒙古語に見える動詞語幹širsa- (中世・西部蒙古語の少なくともある地域に存在したと考えられる)は、同文献に見える šira-及びqatā-と形態的及び意味的にそれぞれ次のような関係にあったものと推定できる

širsa-(< širas- < sira-s-)	形態的關係	šira-《(火で)焼く》
《火で乾かす、あぶる／火にあてて乾く》	意味的關係	qatā-《自然の力で乾かす》

22)deverbal verbal suffix -s-の表示する意味、すなわち、①瞬時体(塩谷 前掲論文)、②暫時体(本論文)はともに<時間的制限の行為>を表示するという点で、1つの意味範疇に属するアスペクトであると考えられる。

なお、本論で述べた《暫時体》を表示するdeverbal verbal suffix -s-は、現代蒙古語(ハルハ方言)では極めて非生産的であり、これに変わってcompound suffix -sxi:- (蒙古語 -схий-; cf. Mo.-ski-)が完全にその地位を占めている。

・ улайсхийх 《少し赤くなる》 < улайх 《赤くなる》

Найр өндөрлөх үед Төмөр гуай огт согтсон

宴会が 終わる 頃、 トウムルさんは 全く 酔った

янзгүй, царай нь улайсхийгээд сууж байсан.

様子もなく、 顔 が 少し赤味を帯びて 座って いた

(この文では、トウムルさんの顔が完全に赤くなったのではなく、少し赤くなったことを示す。)

・ ойртосхийх 《少し近づく》 < ойртох 《近づく》

Та хоёр ойртосхий.

おふたりとも 少し体を寄せて下さい(写真を取るとき、相手に向かって)

(Монгол-япон ярианы дэвтэр(1990) р.311. Улаанбаатар.) (この文では、2人が完全に近づくのではなく、少し近づくことを示す。)

このdeverbal verbal suffix -схий-に対し、Д.Отгонсүрэнはэрчимгүй үйлдэх байдал《動作の程度を弱くするアスペクト》と称しており、非常に興味深く注目される。

また、Д.Отгонсүрэнによると、ухасхий-, тонгосхий-, гялсхий-等の一群の動詞は、語彙的には確かにアスペクト(ここでは《瞬時体》)を表示するが、形態的にはухас + хий-, тонгос + хий-, гялс + хий-の如く分析的であり、主として副詞(ухас, тонгос, гялс等)から瞬間動詞を形成するので、上述の動詞のアスペクト接辞-схий-とは区別すべきであるという見解を述べている。(Д.Отгонсүрэн, Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын

найруулгын үүрэг(1982)p.155.註12 Улаанбаатар.)

例えば、先に述べた улайсхийх 《少し赤くなる》は、前者、suffix -схий-の例であるのに対し、улсхийх 《パツと赤くなる》の方は、後者、すなわち瞬間動詞の例である。この2種の動詞を含む次の文を参照されたい。

・ Доромж уг сонссон бүсгүйн уур дүрсхийн

侮辱の 言葉を 聞いた 女性の 怒りは 急に込み上げ、

шарангуй царайгаа улсхийлгэн найз

黄色っぽい 顔を パツと赤くし 友人の

бүсгүйдээ ойртон очсноо эргэн тойронд олон

女性に 近づいて 行くや、 まわりに たくさんの

танихгүй хүн байгааг анзаармагц биеэ барин

見知らぬ 人が いるのに 気づくと 我慢をし

дуугүй зогсоход түүний хацар улайсхийн

黙って 立ち止まった時、 彼女の 頬は 少し赤らみ

алим мэт болсон байлаа.

りんご のようになったので あった

さて、ここで歴史を遡って検証してみることにする。中世の文献『蒙古秘史』の言語では、《動作の瞬間性》を表示する「-s 動詞」表現(この-s は、《瞬時体》表示副詞形成接辞と考えられる)が計27回見えるが、この場合、動詞は必ずしもki-《する》(これは、現代蒙古語-схий-のхий-に対応する)に限定されるわけではなく、例えば、od-《行く》、ire-《来る》、kele-《話す》、alda-《失う》、oro-《入る》、sa'ū-《座る》、čabči-《切る》等、様々の動詞と結合している。さらに、同文献で、hirmes ülü ki-《まばたきをしていない》(cf. MMo. hirme-; Mo. irme-《まばたきする》)という表現が計3回(cf. 7節、10節、12節)見えるが、この場合、否定詞ülü(これは、通常否定する動詞に前置される)の位置があくまでも動詞ki-に前置しているのであって、決して動詞hirme-に前置し、*ülü hirmes ki-となっているわけではない。以上、2つの理由から、中世蒙古語の『秘史』の時代に、いわゆる「-s 動詞」表現が形態的に1つのcompound suffixとして形成されるに至っていなかったことは明らかである。このことは現代蒙古語においても、例えば、ухасхий-、гялсхий-等の瞬間動詞(《瞬時体》を表示する)がそれぞれ ухас ухас хий-、гялс гялс хий-等と交換可能であり、いわゆる分析的であることと合わせ考えるとうまく納得がゆくことである。

したがって、現代蒙古語において-схий-が共時的に非分析的な1つのdeverbal verbal suffixとして新たに《暫時体》(《瞬時体》でないことに注意)の意を表示しうようになったのは、少なくとも『秘史』の「-s 動詞」表現の種々の動詞が先ずki-として一般化され、その後、歴史的に-s ki- > -ski-の如く接辞化してしまった後であろうと推定

される。

以上の考えを通時的に図示すれば概略次のようになる。

『秘史』の時代	現代蒙古語	表示する意味
「 <u>-s 動詞</u> 」表現 → <u>-s ki-</u> → ↓ 《瞬時体》表示 副詞形成接辞	→ <u>-sxi:-</u> (<u>~-s -s xi:-</u>) 〈分析的〉	《瞬時体》
	…→ <u>-ski-</u> → <u>-sxi:-</u> 接辞化 ↓ 〈非分析的〉 《暫時体》表示	主として 《暫時体》

23)音節末子音-s-~-d-の交替は、若干の形状動詞にも見られる。例えば、сэрсхий-[sersxi:-], сэрдхий-[serdxi:-]は、微妙にニュアンスを異にするが、基本的には《(恐怖・驚きなどで)ギョツとする、ビクツとする》という類似した意味を示す。この2種の動詞を含む次の文を参照されたい。

・ Дэл хадны дээгүүр аргалийн эврийн
馬のたてがみのように突き出た岩の上を アルガリ(野生の雌羊)の 角の
үзүүр сэрсхийн үзэгдмэгц анчин эр сэрдхийн
先が パツと 見えるや、 狩人の 男は ハツと
өндийж дэргэдээ тавьсан бугаа шүүрэн авлаа.
体を持ち上げ そばに 置いた 銃を ひつつかんで 取った

24)Э.Вандуйによれば、ハルハ東方言(халхын дорнод аман аялгуу)とは次の2つの下位方言からなると言う。

1. ヘンティー・アイマグの東部及び南部、ドルノド及びスフバートル・アイマグのハルハ方言
2. ダリガンガ方言

(Э.Вандуй, “Халхын аялгууг судлах асуудал”,
Халхын аялгуу(1970) pp.19-24. Улаанбаатар.)

25)蒙古語ハルハ方言の辞書類には、通常үхтгэх, үхэтхийхの2語が記述されているが、ハルハ出身のインフォーマントより確認した所、現在当地で用いられるのはүхэтхийхの方であり、しかも、通常書き言葉においてであると言う。この動詞を含む次の文を参照されたい。

・ Гэнэт буундуу нирхийн сонсогдмогц бутны
突然 銃 声が とどろいて 聞こえるや、 低木の
ёроолд хяран хэвтэж байсан туулай цочсондоо
底に 隠れ 潜んで いた うさぎは びっくりして

у х а с х и й н х э д х а р а й с н а а у х э т х и й н х ө с ө р
急に 数回 跳び上がった後、 気を失って 地面に
у н а л а а .

倒れた

また、内蒙古の辞書には、この語に対し、＜古旧詞＞と記してあり、上のことと合わせ考えると、現在の蒙古語では、この語はすでに古語的性格が強いものと判断できる。

26)小沢によれば、『秘史』に見える兀窟^{備古}- (üküd^{備古}gü-)は、形態的には蒙古文語の üküdge- (筆者の言う所の üküdkе-)より古い形であり、意味的には動詞 ükü-《死ぬ》との関連で《瞬時死ぬ→失神する、呆然となる》と解されることから、-dgü-(あるいは-d-gü-)を《動作の瞬発性、一回性》を表す接辞的要素とみなしうる可能性があると述べる。しかし、『秘史』に見える üküdgü-を蒙古文語 üküdkе-より古い形態と見なしている点、また、もう1つの蒙古文語形 üküdkи-をこれらとどのような関係で把えるべきなのかという点等、詳細に関しては筆者と見解を異にする。(小沢重男『元朝秘史全釈続攷(上)』(1987)pp.354-355.註(1) 東京)

27)ükü-d-ke-の-ke-が元来causative suffixであるにもかかわらず、語彙的には《意識を失わせる、気絶させる》という他動詞ではなく、《意識を失う、気絶する》という自動詞で用いられることについて、ここで若干説明を加えなければならない。このことは、causative suffixが一般に＜生理現象＞を表す動詞語幹に接続する場合、《(何かが人に)～させる》という本来の意味より転じて、《自分の意志に反して／意識的ではなく無意識的に～する》というニュアンスを表出するようになった結果、語彙的にはあくまでも自動詞として用いられるのと同じ現象である。以下に挙げる例を参照されたい。

1. 中世のアラビア字蒙古語文献『ムカディマツト・アル・アダブ』では、hanis- : hanisqa-(これはhanis-qa-と分析され、-qa-はcausative suffixである)がいずれも《くしゃみをする》という意味で同様に用いられる。

a) qata'ū hanis·ba 《с и л ь н о ч и х н у л》(295)

激しく くしゃみをした

b) hanisqa·ba 《ч и х н у л》(181)

くしゃみをした

hirē·be hanisqa·qsan 《п р о и з н е с б л а г о е

祝福した くしゃみをしたものを пожелание чихнувшему》(185)

(塩谷 前掲論文(1989)pp.60-61.)

2. 現代蒙古語(ハルハ方言)では、＜生理現象＞を表す動詞に対しては、使役形、非使役形の両形とも用いられるが、どちらかと言えば対応する使役形の方がよく使われる。

使役形 非使役形

《咳をする》 х а н и а л г а х х а н и а х

《あくびをする》 э в ш э э л г э х э в ш э э х

《げっぷをする》 х э х р ү ү л э х х э х р э х

(塩谷茂樹「ダグール語ハイラル方言の口語資料－テキストと注釈－」『日本モンゴル学会紀要』No.21(1990)p.69.註10.-6.東京)

例えば、次のように用いられる。

A(医者) : Х а н и а л г а ж б а й н а у у ?

咳が出て います か

Х а м а р ч и н ь б и т ү ү р ч б а й н а у у ?

鼻 (←あなたの)が つまって います か

B(患者) : Т и й м э э , д о о к т о о р , х а м а р б и т ү ү , и х

はい、 先生。 鼻が つまって、 たくさん

х а н и а л г а ж б а й н а .

咳が出て います

なお、この例文は、次の本から引用した。

Jaroslav Vacek, *Učebnice mongolštiny-Hovorový styl*(1979)p.233. Praha.

3. 上の2. で述べたことは、ダグール語(ハイラル方言)においても、ほぼ同様に当てはまる。例えば、当該言語では、xanje:d- : xanje:dəlgə:- (これはxanje:d-ə-lga:-と分析され、-lga:-はcausative suffixである)はいずれも《咳をする、咳が出る》の意味であるが、後者の方がより自然で、しかも文体上良い表現法だと言う。

xalu:nminj bo:sən a:je:ʃ, bas l xanje:dəlgə:dʒa:wəi.

熱(←私の)は下がったけれど、まだ咳が出ます(塩谷 前掲論文(1990)pp.67-69.)

以上、1. , 2. , 3. の事柄を総合すると、蒙古文語に見えるüküdke-に対し、少なくとも*üküd-(この形は現在実証されない) : üküdke-の形態的対立を想定し、後者の動詞において、causative suffix -ke-がその本来の意味を失ったと考えることは十分に容認することができよう。なお、蒙古文語üküdke-の直接の後身は、ブリヤート語のүхэдхэ-(cf. 蒙古語үхтгэ-)であろうが、ブリヤート語の辞書では、この形式をүхэ-《死ぬ》の一種の使役形(ただし、意味上の直接の使役形はүхүүл-《死なせる》であることは言うまでもない)と見なしていることは筆者の考えの傍証となるものである。

28)註22)を参照。

29)Г.М.Василевич, *Эвенкийско-русский словарь* (1958)p.790. Москва.

30)ただし、満州文語では、《瞬時体・暫時体》の意味を表示する若干の動詞語幹から要素-sla-(<-s+la-)を抽出することができるが、これは、蒙古文語の要素-ski-(cf. 蒙古語-схий-)にほぼ対応するものである。

満州文語

dokdosla- 《一瞬どきりとする》

(cf. dokdola-《びっくりする、どきりとする》

endesla- 《わずかに誤る》

(cf. ende-《誤る》

蒙古文語

: doɣdoski-《一瞬ブルッと震える》

: doɣdol- 《震える、どきどきする》)

: endeski-《同左》

: ende- 《同左》)

ここで、両言語に共通して見える要素-sは、起源的にはdeverbal verbal suffix(V→V)と見るよりはむしろ、《瞬時体》表示副詞形成接辞(註22)を参照)と見るべきであろう。

その他、満州文語には、要素-sla-を有する動詞に次のものがある。

Ma. okjosla-《軽はずみなことを言う、または行う》

なお、この語は次のような派生過程を経て形成されたものと推定される。

Ma. ok 《(擬声語)①驚きの声②嘔吐の声》

> *ok-jo-《*驚く(okの①の意味で)》(cf. Ma. ok-si-《吐く(okの②の意味で)》)

> *okjo-s《*瞬間的に驚く動作を表す副詞》

> okjos-la-《*人がギョッと驚くことをする→軽はずみなことを言う、行う》

(*は実際には実証されない推定形及び推定された意味を示す。)

一方、蒙古語で形態的にこれに対応する語は、おそらく中世の文献『秘史』に見える幹札(ogjad-)《驚》(199)であろうが、現在の蒙古語では、これに対する直接の後身は見られない。

31)現段階では、この現象が内蒙古のどの下位方言にまで及ぶものか地域的に特定できないので、便宜上、「内蒙古語・下位方言」と記述するにとどめた。

32)内蒙古自治区赤峰市阿魯科爾沁旗巴彥塔拉蘇木出身のインフォーマントによる。

33)内蒙古自治区哲里木盟科爾沁左翼中旗海力錦蘇木出身のインフォーマントによる。

34)suffix -dā-⁴は、その他、passive suffix -gd-(cf. Mo.-yda-²)を伴う若干の動詞語幹の直後にも見られると言う。以下は、アルホルチンの口語の例である。

tər xol, be:ʃin xaragdādāɖ be:n. 向こうに家が見える

(Mo. tere qola bayising qara-yda-ju bayina.)

この文を、同方言の tər xol, be:ʃin xaragdādāɖ be:n. と比較すると、後者は単に《向こうに家が見える》という事実を客観的に述べているのに対し、前者は《向こうに家が細部にわたってあれこれはっきりと見える》というニュアンスの違いを示すと言う。これは、「家」そのものを、言わば、<総数(generic number)>としてではなく、<部分数(partitive number)>として解釈することによって、suffix -dā-⁴(V→V)に内在する〈複数概念〉をうまく説明できる可能性がある。

35)このsuffix -dā-⁴は、当該の下位方言では、例えば、ホルチン出身のインフォーマント(註33)を参照)によると、《念を押すような気持ちを込めて述べる》際に用いられると言う。また、アルホルチン出身のインフォーマント(註32)を参照)によると、このsuffixは結果的

に《聞き手の注意を引く働きをする》と言う。

36)柴谷方良、影山太郎、田守育啓『言語の構造－理論と分析－意味・統語篇』(1982)pp. 100-106. くろしお出版 東京

37)動詞улайд-に対し、улайс-という形も同様に見られるが、この2語の形成過程に関し、筆者は、улай-の直接の派生語はあくまでもулайд-の方であり、улайс-はそれの単なる音声的交替(音声末子音-d-~-s-の交替)を反映した形式ではないかと考える(улай- > улайд-~улайс-)。以下、улай-とулайд-を含む次の文を参照されたい。

• Өвгөн дархан тулман хөөрөгнийхөө

年老いた 鍛冶屋は、 皮袋の ふいごの

даруулгыг зугуухан хөдөлгөх үес бүдэг бадаг

圧縮棒を ゆっくりと 動かす と、 かすかに

улайх хусны нүүрс төдөлгүй цайвар шаргал

赤らむ かばの木の 炭が まもなく 白 黄

өнгөөр туяаран байснаа хурц шар дөл

色に 光り輝いて、 その後 まばゆい 黄色の 炎が

өрвөсхийн бадарч дээр нь тавьсан хавтгай

パツと 燃え上がり、 その上に 置いた 平らな

хөх төмөр хэдэн хормын дараа улайдав.

青 鉄は 数 分 後に 赤熱した

38)この他、蒙古語・ハルハ方言では、suffix -d-(V→V)の原義が全く失われてしまったと思われる例も若干見られる。

зээл-(Mo. jigele-) = зээлд-(Mo. jigeled-) 《(お金を)借りる》

cf. зээлүүл- = зээлдүүл- 《(お金を)貸す》

この2種の動詞を含む次の文を参照されたい。

Би тэр хүнээс 10 төгрөг зээлсэн/зээлдсэн.

私は あの 人から 10 トウグルグ 借りた

Би тэр хүнд 10 төгрөг зээлүүлсэн/зээлдүүлсэн.

私は あの 人に 10 トウグルグ 貸した

ただし、шим-(Mo. sime-)《吸う》、шимт-(Mo. simed-)《しみ込む》という例に関して言えば、後者の動詞は、前者の対応する動詞より派生したと考えるよりはむしろ、үйл(Mo. üile)《行為》> үйлд-(Mo. üiled-)《(ある行為を)する、行う》のように、対応する名詞語幹шим(Mo. sime)《栄養、滋養、養分》より派生したと考えるべきであろう。しかも、意味的には、後者の動詞に対し、元来《栄養(養分)を取る》という意味を仮定し、これが《しみ込む》を意味するようになったものと解釈できる。

39)denominal verbal suffix -(y)id-に関しては、小沢重男『元朝秘史全釈(下)』(1986) pp.228-229.註(2) 東京を参照。また、このsuffixの例として、さらに『秘史』で次のような例がみられることも付記しておく。

孛斡(bo'öl)《奴隸》> bo'ölid-《奴隸にする》(cf.(§ 154)孛斡里都牙(bo'ölid-u-ya)《奴隸にしよう》)

なお、この語は、『ム』ではböllä-(< bö1)と見え、いわゆる-(y)id-系ではなく-la⁻²系が用いられていることに注意したい(註6)を参照)。

40)蒙古語ハルハ方言の辞書、例えば(Ц)には、Mo. simsirid-に対しшимширтехという語が記載されているが、ハルハ出身のインフォーマントより確認した所、この語は現在、ハルハ方言では用いられないようである。

41)筆者は、かつてdeverbal verbal suffix -s-(この場合、-s-は《瞬時体》の意味を表示する)の直前にも、suffix -i-が遭遇することを指摘した。

Mo. onisqa《謎、なぜなぜ》< oni-s-qa < ong-《当たる、命中する、言い当てる》

Mo. jogis-《しゃっくりをする》< jogi-s- < *jog-i- < joγ《動作の中断を表す副詞》(cf. joγso-《(じつと)立つ、止まる》)(塩谷 前掲論文(1989)pp.64-66.)

このように、deverbal verbal suffix -s-/d-の直前にsuffix -i-が遭遇しているのは、単なる偶然によるものではなく、それぞれ、双方の間に何らかの統合的(syntagmatic)な、密接な意味のつながりがあることに起因しているものと思われる。例えば、先のMo. oni-s-qa, jogi-s-の場合は、次のように定式化することができるだろう。

-i-	/	___	+ -s-(V→V)
《単発性・一回性》		《瞬時体》	(+はmorphological boundaryを指す)

しかし、本文の4.3.で掲げた蒙古文語の動詞対の、それぞれ後者に関しては、deverbal verbal suffix -d-の表示する意味が現在の所、不明なので、どのように定式化すべきなのかは、今後慎重に検討すべき問題である。

42)註8)を参照。

43)語幹末の-d-をdeverbal verbal suffixと見なし、後者を前者の派生語と考える場合の長所は、例えば、janu- → jani-d-, simsire- → simsiri-d- 等の派生過程を考える際、それぞれの中段階において、語幹末にsuffix -i-を有する形式(この場合は、jani-, simsiri-等)が実際に実証されるかどうかを全く考慮することなく(この場合は、たまたま実証されない)、その派生過程をうまく説明できる点にある。本文の3.1.では、『秘史』のüderi-, üderid-に対し、*üdere-(< üde)を想定し、その結果、

*üdere- → üderi- → üderid-

のような派生過程を考え、考察を進めたが、ここで述べた考えに従うならば、『秘史』のüderid-に対し、語幹末の-d-をdeverbal verbal suffixと見なし、直接、

*üdere- → üderi-d-

のような派生過程を想定し、この場合は、語幹末にsuffix -i-を有する形式、すなわち、üderi-がたまたま『秘史』で実証されると解釈することも可能であろう。

44)ただし、このdeverbal verbal suffix -d-がもしもアスペクト接辞であったならば、少なくとも本文で論じた、3.3.1.《完成体》、3.3.2.《暫時体》、3.3.3.《眼前現象の強調》.のいずれかの意味であっただろうということは、蒙古語内部の分析より十分推定可能なことであり、今後の研究にとって極めて有用な指標となるものである。

45)小沢は、『秘史』の中合里敦(qalidun)に対し、[qalidu-‘近づく、せまる’の非分離副動詞形]と記しており、動詞語幹をqalid-ではなく、qalidu-までと見ているようである。(小沢重男『元朝秘史全釈続攷(中)』(1988)p.323. 東京)

46)『秘史』のqalid-に対し、蒙古文語でも同様にqalid-が期待されるが、蒙古文語で実証されるqalid-は、《(たか等の鳥が)飛び上がる、舞い上がる》を意味し、Mo. qali-(х а л и х)《1. あふれる 2. 舞い上がる 3. 逝去する》と形態及び意味的に関係のある語であって、『秘史』のqalid-《近づく》とは全く別の語であることに注意したい。(二十一巻本) qalid- / qarčayai-yin ĵerge sibayū-yi talbiĵu, taulai yurγuul-i

たか 等の 鳥 を 放ち、 うさぎ きじ を
bariqu ügei degegsi qaliqui-yi qalidumui kememüi.
捕まえずに 上空を 飛ぶことを qalid-u-muiと言う

(Ⅲ) qalid- / orkiγsan qarčayai-yin demei degegür niskü.

放った たか の 無意味に上空を飛ぶこと

(L) qalid-(---)《vi. To fly up, soar up.》

47)額爾登泰、阿爾達扎布 前掲書(1986)p.651.註⑩による。

48)額爾登泰、阿爾達扎布 前掲書(1986)pp.929-930.註⑭

49)巴雅爾 前掲書(1981,下)p.1411.

50)小沢重男『元朝秘史全釈続攷(下)』(1989)pp.505-506.註(7) 東京

51)Mo. uli-(у л и х)が蒙古語で《(狼・犬等が)遠吠えする》を意味することは、次の辞書類の説明より明らかである(ただし、単に《吠える》を意味する基礎語彙は、Mo. quča-(х у ц а х)である)。

(二十一巻本) uli- / činua noqai qoyisi uruγsi yeke daγun-iyar urtu duuγarqui-yi

狼・犬が 後ろへ 前へ 大 声 で 長く 鳴くこと を
ulimui kememüi.

uli-muiと言う

(L) uli-(у л и х)《vi. To howl (of dogs, wolves, etc.).》

52)『秘史』の兀里思-の傍訳《惹帶》は、おそらく《引き起こす》ぐらいの意味だろうが、仮に、この傍訳を参照した場合でも、《言葉・声を起こす》とは、つまり《言葉・声を上げる(出す)》と解されるので、筆者の訳語、すなわち《言葉・声を張り上げる》とそれほ

ど大きな隔たりはないものとする。また、『蒙古秘史』の節ごとの総訳で、この箇所に対し、『---初出門便惹是非。---』という訳が与えられているが、ここで《惹是非》は、『悶着を起こす、物議をかもす』という意味であり、これを《言葉・声を張り上げる》という直訳の完全な意識として理解することは十分可能な範囲と思われる。

53) 註22)を参照。

54) 塩谷 前掲論文(1989)pp.70-73.

本文及び註で用いた若干の略語及びその出典は次のようである。

『ム』：『ムカディマツ・アル・アダブ』

Н.Н.Поппе, Монгольский словарь мукаддима тал-адаб(1971 rpt.) England.

(二十一巻本)：内蒙古蒙古語文学歴史研究所整理『二十一巻本辞典』(蒙古文)(Qorin niyetü tayilburi toli)(1977)内蒙古人民出版社 呼和浩特

(Ш)：Šavji, Mongᡥol üsüg-ün dūrim-ün toli bičig(1937) Ulaanbaatur.

(L)：F.D.Lessing, Mongolian-English Dictionary(1960) Berkeley and Los Angeles.

(Ц)：Я.Цэвэл, Монгол хэлний товч тайлбар толь
(1966) Улаанбаатар.

(蒙漢)：内蒙古大学蒙古語文研究室編『蒙漢辞典』(1976) 呼和浩特

(しおたに しげき、研修員)